

少女とおじさんが駄弁 るだけ（凍結）

ヤマニン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は少女とおじさんが公園のベンチでおしゃべりするだけのお話です。容姿などは読者様の想像にお任せします。

基本的に雑談です。

投稿ペースは1週間に1回のペースを予定しています。この物語は作者の妄想で構成されています、ご理解のほどお願いいたします。

目次

出会い	少女視点	1
出会い	おじさん視点	11
近況について	少女視点	24
春について	おじさん視点	34
少女の日常		43
梅雨について	おじさん視点	54
熱中症について	少女視点	62
感情について	おじさん視点	70
初夏について	少女視点	78
思い出について	おじさん視点	85
少女の散歩		92
暑さ対策について	おじさん視点	

99

三相について	少女視点	107
二人について	おじさん視点	116
夏休みについて	少女視点	123
怪談について	おじさん視点	133

出会い 少女視点

私は何の変哲もない中学校に通う中学2年生。部活に入ってもないのに毎朝6時に起きて、6時半には家を出る。少し普通の中学生とは変わってるかもしれないが、1年生の時からこの生活をしているから今更もう変えようとは思えない。今は…だけど。そんないつもと変わらない日に今日もなるはずだった。

「…あなたは、だれ？」

「…はい？俺のこと？」

「そのベンチに座ってるのはあなたしかいないと思うのだけど」

「いや、俺が言いたいのはそうじゃなくて主語を入れて喋ってくれないか。あなただけ？じゃ何が言いたいのかよくわからん」

「ごめんなさい。私は喋るのが得意じゃないから」

「……そうか」

なぜ私はこのおじさんと喋っているのだろう。いや、喋りかけたのはこちらなのだけ
れど。

「私は、1年前ぐらいから雨が降る日を除いてそのベンチで本を読んだり景色を見る

のが日常化してたから……」

「あくなるほどね。それで俺がここのベンチに座ってたからおもわず声かけちゃった訳ね」

「……んっ」

私はおじさんの言うことに頷いた。そんな私を見ておじさんは「んっ」と低いうなり声をあげながら私を見る。

「なに？」

「えつとね？いくらおかしなことがあつたからって見知らぬ人……しかも男の大人に話しかけるのは如何なものかと思つてね」

「そのの何がまずいの？」

「いや、いろいろまずいでしょ。俺の世間からみられる目とか君の身に迫る危険性とか」「おじさんは私に何かするつもりなの？」

私は自分の体を抱きしめるように守る仕草をする。私の行動を見ておじさんはあきれたように……

「俺がもし、君に何かしようものなら君とのんびりお話ししないで速攻で君の口を押さえて拘束すると思わないかい？」

「確かにそう思う」

私は一人納得をし、おじさんの横に座る。

「…のんびりしてていいのかい？君は見たところ学生だろ」

「おじさんもこんなところでのんびりしてていいの？スーツ着てるってことは社会人でしょ？」

「…君、まだ時間はあるか？」

「まだ1時間以上あるから大丈夫」

「なら1つ相談に乗ってくれるかい？なんか君になら話してもいいと思ってるね」

「かまわない」

「ありがとう」

おじさんはお礼を言うのと立ち上がり少し背伸びをする。

「あの…話は？」

「少し待ってて、飲み物があつたほうが話しやすいだろ。何がいい？」

「いや悪いから大丈夫」

「遠慮するな。相談を受けてもらうんだ、相談料は受け取ってくれ」

「…ならお茶で」

「了解した」

おじさんはそういうと自動販売機のほうに走っていった。少ししておじさんは戻つ

てきて、私に某健やかになる美茶（250ml）を渡してくる。

「んっ。ありがとう」

「いえいえ」

おじさんはブラックコーヒーのプルタブ：じやないんだっけ。前に本で読んだけどステイオンタブというらしい。それをおじさんは外し、ごくつとコーヒーを飲んだ。

「ん？君も見えてないで飲んでいいよ」

「そう…ならいたadakimasu」

私はお茶のキャップを回して外し、飲み口に口をつけお茶を飲む。

「さて、時間も限られてるから話し始めるよ」

「んっ、大丈夫」

おじさんは缶をそばに置いて前を見据えながら話し始めた。

「実はね、俺には婚約者がいるんだ」

「…」

「その人とは仲良くしてるし、その人の両親とも仲良くさせてもらってる」

「ならなぜ迷っているの？」

「…驚いた。まだ話の中心を話していないのによくわかったね」

「…いやなんとなくだけど話の展開的に迷ってるかなと思っただけ。深いところはよく

わからない」

「そこだけ分かっているならよくできたものだよ。続けるね」

「君の言った通り俺は迷っているんだ。仕事も順調、婚約者の間柄も良好。これ以上のないくらいに順調なんだ」

「しかし、心のどこかで靄がかかっている気がしてならないんだ。なにか大切なことを見失っているような気がするんだ」

「…それがわからないと?」

「だからこうして朝から悩んでるんだ。この靄を晴らさない限り俺は先に進めない気がしてね」

おじさんは少し暗い顔をして私のほうを見た。

「君はあるかい?とても幸せな状態なのに心に穴が開いたような気分になったこと…」

「いや、この質問を学生である君に話すのは少しおかしいよな」

「すまん、忘れてくれ」

おじさんは少し申し訳なさそうに頭を下げた。それに対し私は気にしてないと返す。要するにおじさんは何事もうまくいっているから次に何か悪いことがあるんじゃないかと未来を悪く予想してるんじゃないかと思う。

「おじさんの靄が何なのかは私にはよく分からない」

「…うん」

「でも、その心に空いたかのような気持ちというのは確かなことなの？ 順調すぎるがゆえに感じるナニかじゃない？」

「そこは曖昧なんだね」

「私、中学生だから言葉足らずなのは許してほしい」

「えっ!? 君、中学生だったの？」

「そうだけど」

「まじか…俺は中学生の女の子にこんな重い相談をしたのか」

おじさんは少しショックを受けていた。

「続き話していい？」

「んっ…かまわないよ」

「そのナニカってというのがおじさんが感じる虚無感に通じてると思う。だから、その虚無感を満たす為に行動すればいい」

「つまりは？」

「空いた穴を埋めるにはその穴に入る思い出または幸せを入れてあげればいい」

「まずは仕事と婚約者のどちらで穴を埋めたいかを考える。どちらかが決まったらあとは行動するだけ。仕事なら同僚や後輩と飲みに行くとか、婚約者のほうなら家族を交え

て旅行に行くとかする」

「悪いけど、私が考え付くのはここまで。あまり力にならなくてごめんなさい」

「……」

おじさんは何か考えるように空を見上げていた。私は喋りすぎてのどが渴いたのでお茶を飲む。少ししておじさんは決意した顔で私を見た。

「…その顔を見ると決意は固まった？」

「そうだね。中学生に相談してこんなに楽になるとは思わなかったよ。君は将来心理学でも学ぶのかな」

「…こんな私にはコミュニケーションなんて向いてない」

「そんなことないと思うけどね…まあ君のおかげで少し解決の糸口を見つけることができたよ」

「ありがとう」

おじさんにはにつこりと笑った。私もうれしくなって少し頬が緩んでしまった。

「おつ、君もそんな顔するんだな。会った時から無表情だったからギャップがすごかったよ」

「ギャップ？」

「普段との落差がすごいってことだよ」

「…要するにどういふことなの」

「笑った君はとても可愛かったってことだよ」

「……ッ!!」

私は咄嗟におじさんから視線を外し、地面のほうに顔を下げた。自分でもわかるぐらゐに顔が赤くなっている。

「男はね、君のような子の照れた顔を見る事で幸せも感じるし、守りたいと思えるんだ」
「…皆まで話さなくてもいい! 恥ずかしいからっ!」

「俺も生まれるのが10年遅かったら君に恋してたかもしれないね」

「……」

私はおじさんのそんな言葉を恥ずかしながらも受け止めた。何も返すことはできなかったけど、心がとても温かくなるくらい嬉しかった。

「さてと、そんなに長く話したつもりはないけどもう7時半か。そろそろ会社に向かうとするか」

おじさんはそういうと立ち上がり、空になったであろう空き缶を自動販売機に備え付けてあるごみ箱に捨てた。

「それともう一つ、君に言うことがあってね」

「……なに?」

私は少なくなつたお茶を飲みながら返事をした。

「君はおじさんおじさんと呼んでいるけど、俺はまだ24才だからな！おじさんって言われるような年齢じゃないぞ！」

私は驚きのあまり目を見開いた。それくらいインパクトが強かった。

「その驚き方は少し傷つくがまあいいさ」

おじさんはそう言い、ベンチに置いてあつたカバンと上着をとつて……

「じゃあな、嬢ちゃん。君のおかげで元気が出たよ」

おじさんは片手をあげながら去つていく。私はそれを見届ける。……いや勝手に口が開いていた。

「……あ、あの……」

少し大きな声で呼び止めた。おじさんは私が大きな声を出したことに驚きながら振り向いた。次に私は対照的に小さな声で……

「……また、会える？」

「……」

私は不安げにおじさんを見つめる。おじさんはニカッと笑つて、

「また、明日な！」

……こう言った。私はそれに答えるように返事をした。

「…うん。また明日！」

こうして私の何気ない日常が始まるのだった。

出会い おじさん視点

俺は何の変哲もない会社で働く会社員だ。歳は24歳で、今年で社会人3年目とまだまだ若手。そんな俺はこう言っては何だがとても幸せな状態にいる。会社の業績も人間関係も良好。そして、俺より歳が一つ下の婚約者がいる。同棲もしていて、とても愛くるしい笑顔で「お帰りなさい！」と疲れた身体を労わってくれりとてもできた嫁さんだ。嫁さんのご家族との間柄も良好で、言ってしまうえば俺は幸せの真っ只中にいるという訳だ。

しかし、なぜか最近はこの幸せが終わってしまうんじゃないかと危機感を感じている。そんな根拠は一切ないし、嫁さんに相談したら「私たちの幸せがこんなところで終わるはずがないから心配しなくてもいいんだよ」と優しい言葉をかけてくれた。だが、俺の気持ちが晴れることはなかった。

そんななか、少しでも気分を変えするために俺はいつもより早めに家を出て、なんとなく見つけた公園のベンチに腰を下ろした。

「…はあくなんなんだ。この気持ちは」

俺がしばらく考え込んでいると、声をかけられた。

「…あなた、だれ？」

そこにいたのはセーラー服の女の子だった。

「…はい？俺のこと？」

今、俺以外にこの公園には人はいないが一応確認をする。社会でも確認は大切だからな！すると少女は（ほぼ無表情だが）不思議そうな表情をして

「そのベンチに座っているのはあなたしかいないと思うのだけど」

「いや、俺が言いたいのはそうじゃなくて主語を入れて喋ってくれないか。あなただれ？じゃ何が言いたいのかよくわからん」

ある程度予想することはできるけど確かなものじゃないしな。少女は無表情でこう言う。

「ごめんなさい。私は喋るのが得意じゃないから」

「…そうか」

なんか訳ありの子なのだろうか…。あんまり表情を出すのも苦手みたいだし。

「私は、1年前くらいから雨が降る日を除いてそのベンチで本を読んだり景色を見るのが日常化してたから…」

「あくなるほどね。それで俺がここのベンチに座っていたから思わず声をかけちゃった訳ね」

「……んっ」

少女はこくつと頷く。こう思つたらダメなんだけど、この子世間知らずだな。俺はうなり声をあげながら少女を見た。少女は怪訝そうな目をして俺を見る。

「なに?」

「えつとね?いくらおかしなことがあつたからつて見知らぬ人…しかも男の大人に話しかける如何なものかと思つてね」

「その何がまずいの?」

まじで?それが分からないとかどんだけ純粹なの。俺は若干あきれたように少女を見る。

「いや、いろいろまずいでしょ。俺の世間からみられる目とか君の身に迫る危険性とか」「おじさんは私に何かするつもりなの?」

いや、しないし。てかできないし!これでも結婚控えた男ですからね!こんなこと嫁さんや知人に知られたら首がパーンつて飛ぶよ!

「俺がもし、君に何かしようものなら君とのんびりお話ししないで速攻で君の口を押さえて拘束すると思わないかい?」

「確かにそう思う」

少女は納得したように頷き、俺の隣に腰を落とした。いや、なんで隣に座るの!分

かったんじゃないのかよ？まあ、いいや。俺は気になったことを少女に尋ねた。

「…のんびりしてていいのかい？君は見たところ学生だろう？」

「おじさんもこんなところでのんびりしてていいの？スーツ着てるつてことは社会人でしょ？」

うぐつ！なかなか痛いところを突かれたな。…俺はふとこんな考えにたどり着いた。『自分で悩んで考えてもダメだったし、この少女に相談してみようかな』と。次には何考えてるんだと自分を殴りたくなる。こんな見ず知らずでしかも自分より明らかに7歳以上は離れているであろう少女に相談するなんて…。…でも、もし相談して少しでも解決する可能性があるなら俺は賭けてみたい。俺の理性で抑えられなかった口が開く

「…君、まだ時間はあるかい？」

…言ってしまった。

「まだ1時間以上はあるから大丈夫」

「なら1つ相談に乗ってくれるかい？なんか君になら話してもいいと思ってね」

「かまわない」

「ありがとう」

これでもう後戻りはできない。ごめんな、こんな重い話を君みたいな少女にするのは間違ってる。そんなことはわかっている。頼む！俺を助けてほしい。俺は心の中で少

女に謝り、立ち上がった。あく少し長いこと座ってたから腰が痛い。ダメだな…まだ24歳なのに。

「あの…話は？」

少女は疑問といったような目で俺を見てくる。

「少し待ってて、飲み物があつたほうが話しやすいだろ。何がいい？」

「いや悪いからいい」

「遠慮するな。相談を受けてもらうんだ、相談料は受け取ってくれ」

少女は少し考えると…

「…ならお茶で」

「了解した」

俺は駆け足で自販機のもとに走っていく。俺はブラックコーヒーを、少女には某爽やかな美茶を買って少女の元に戻り、お茶を少女に渡した。

「んっ。ありがとう」

「いえいえ」

少女はお茶を受け取るとお礼を言う。こうやって素直にお礼が言えるのは親の教育が行き届いてるのか、それともこの子がただ単純に賢いだけなのか。それでもこの子が優しい子だというのは話した感じで分かった。ただ、表情が硬いのは気になるが。ち

らっつと少女を見ると彼女はお茶には手を付けずに俺のことをじつと見ていた。

「ん？君も見てないで飲んでいいよ」

「そう…ならいただきませす」

少女はそう言って、お茶のキャップを外しお茶を飲み始めた。少女がキャップを閉めたのを横目で確認し、俺は本題に移る。

「さて、時間も限られてるから話し始めるよ」

「んっ、大丈夫」

俺はコーヒー缶を横に置き、前を向いて情景を思い浮かべるようにただ前を見た。

「実はね、俺には婚約者がいるんだ」

「…」

「その人とは仲良くしてるし、その人の両親とも仲良くさせてもらってる」

俺は簡単にゆっくりと内容を話していく。すると少女から驚きの一言が飛び出した。

「ならなぜ迷っているの？」

「…っ！」

少女は俺の心を見透かしたかのようにいきなり核心に迫ってきた。

「…驚いた。まだ話の中心を話していかないのによくわかったね」

「…いやなんとなくだけど話の展開的に迷ってるかなと思っただけ。深いところはよく

わからない」

「そこだけ分かつてるいるならよくできたものだよ。続けるね」

少女の顔を見るに言ってることはホントのようだ。俺は話をつづけた。

「君の言った通り俺は迷っているんだ。仕事も順調、婚約者の間柄も良好。これ以上のなくくらいに順調なんだ」

「しかし、心のどこかで靄がかかっている気がしてならないんだ。なにか大切なことを見失っているような気がするんだ」

「…それがわからないと?」

「だからこうして朝から悩んでいるんだ。この靄を晴らさない限り俺は先に進めない気がしてね」

俺は普段嫁さんや同僚たちには見せないような暗い表情をしているんだろうな。俺は申し訳なくなりつつも少女を見る。

「君はあるかい?とても幸せな状態なのに心に穴が開いたような気分になったこと…」

「いや、この質問を学生である君に話すのは少しおかしいよな」

「すまん、忘れてくれ」

俺は畳みかけるように一気に話した。俺は軽く頭を下げながら少女のほうを見る。少女は俺を見据えながら、何か考えてるような顔をしていた。すると、少女が口を開く。

「おじさんの露が何なのか私にはよく分からない」

「…うん」

だよな…こんなことこんなに幼い子に話すことが間違っている。俺は少し期待してたのかもな、普通の女の子とは雰囲気が違うこの子に。俺が内心あきらめていると少女は、「…でも」と言葉をつづける。

「その心に空いたかのような気持ちというのは確かなことなの？ 順調すぎるがゆえに感じるナニかじゃない？」

「そこは曖昧なんだね」

「私、中学生だから言葉足らずなのは許してほしい」

「えっ！君、中学生だったの？」

「そうだけど」

「まじか…俺は中学生の女の子にこんな重い相談をしていたのか」

俺は自分がした行動にショックを受けた。少女は気にした様子はなく、

「続き話していい？」

と聞いてきた。

「んっ…かまわないよ」

俺は若干のショックを残しつつも少女の言葉に耳を傾けた。

「そのナニかっつていうのがおじさんが感じる虚無感に通じてると思う。だから、その虚無感を満たす為に行動すればいい」

虚無感…：なんか少し違う気もするが言いたいことはよく分かる。

「つまりは？」

「空いた穴を埋めるにはその穴に入る思い出または幸せを入れてあげればいい」

「まずは仕事と婚約者のどちらかで穴を埋めたいかを考える。どちらかが決まったらあとは行動するだけ。仕事なら同僚や後輩と飲みに行くとか、婚約者のほうなら家族を交えて旅行に行くとかする」

「悪いけど、私が考え付くのはここまで。あまり力にならなくてごめんなさい」

「……」

俺は少女の言葉に衝撃を受けていた。彼女が紡いだ一つ一つの言葉が俺の中に入ってくる感じがする。俺は、空を見上げながら少女が言ったことを参考に考える。そうか、なにも不安を感じる必要はなかったのか。そうだよ、幸せだと感じているのに悪い予感をする必要がどこにあるんだ！むしろもつと幸せを広げていくことのほうが有意義だし、大切なことなんじゃないのか！俺はなんでこんなことにも気づかなかつたんだ。この少女に言われて初めて気づくとは社会人失格だな。俺は横に座る少女を見た。彼女はお茶をちまちまと飲んでいた。

「…その顔を見ると決意は固まった？」

「そうだね。中学生に相談してこんなに楽になるとは思わなかったよ。君は将来心理学でも学ぶのかな」

俺は冗談を交えて少女に聞いた。

「…こんな私にはコミュニケーションなんて向いてない」

「そんなことないと思うけどね…まあ君のおかげで少し解決の糸口を見つけることができたよ」

「ありがとう」

俺はできる限り精一杯の笑顔を少女に向けた。少女は俺を見て嬉しかったのか、無表情だった顔の頬を緩めて笑った。

「おつ、君もそんな顔するんだな。会った時から無表情だったからギャップがすごかったよ」

「ギャップ？」

俺は少女に冗談に聞こえる本音を言った。彼女はギャップの意味が分からなかったのか首を傾けた。

「普段との落差がすごいってことだよ」

「…要するにどうということなの」

「笑った君はとても可愛かったってことだよ」

「……ッ!!」

少女は恥ずかしくなったのか急いで顔を俺から背け、下を向いた。しかし、横顔は見えているので顔が赤くなっているのはとても可愛らしいと思った。

「男はね、君のような子の照れた子の顔を見る事で幸せも感じるし、守りたいと思えるんだ」

「…皆まで話さなくてもいい！恥ずかしいからっ！」

「俺も生まれるのが10年遅かったら君に恋してたかもしれないね」

「……」

俺は、少女の初心な反応を楽しんだところで立ち上がる。

「さてと、そんなに長く話したつもりはないけれどもう7時半か。そろそろ会社に向かうとするか」

俺は自販機に備え付けてあるごみ箱に空になった缶コーヒーを捨てる。俺は少女の方を見て言いたかったことを言う。

「それともう1つ、君に言うことがあってね」

「……なに？」

少女はお茶を飲みながら単調に答えた。

「君はおじさんおじさんと呼んでいるけど、俺はまだ24才だからな！おじさんって言われるような年齢じゃないぞ！」

俺は最初のほうから気になっていたことを少女に向けて話す。すると、少女は俺の年齢に驚いたのか目を見開いていた。

「その驚き方は少し傷つくがまあいいさ」

俺は、ベンチに置いてあったカバンと上着をとり、公園に出入口に向かう。

「じゃあな、嬢ちゃん。君のおかげで元気が出たよ」

俺はギザらしく片手をあげ少女に別れを告げた。俺が歩き出すと、少女が俺を呼び止めた。

「…あ、あのー！」

とてもさつきまで話していた少女の口から出たとは思えない少し大きめの声だった。

俺は、驚いて後ろを振り向いた。

「…また、会える？」

少女はさつきの大声が嘘のように小さな声でそう聞いてきた。そんな不安げにみる彼女に向かって俺は少年のように笑い…

「また、明日な！」

と言った。少女はその返答が嬉しかったのか微かに微笑みながら…

「…うん。また明日！」

と返事をした。

こうして俺の何気ない日常が始まるのだった。

近況について 少女視点

Chapter 2 近況について

おじさんと出会ったあの日の翌日、おじさんは約束通り、公園のベンチに座っていた。おじさんはあの日の後に起こったことを簡単に話してくれた。どうやら私が話したことを参考にしたらしい。おじさんは私に「ありがとう」と何回も言ってくる。そんなにお礼を言われたことがないので、なんだか気恥ずかしい。

私とおじさんはあの公園で一か月たった今でも会い続けている。私はいつも通りにあの公園に行くだけなのだけど、なぜかおじさんもいて一緒に朝のひと時を過ごしている。私と一緒にいるぐらいならお嫁さんと一緒にいた方が有意義だと思う。

「最近、学校の方はどうだい？」

「どうって?」

「いや、うまくいつてるかなって意味」

おじさんはコーヒーを飲みながら私に最近の状況はどうだと聞いてきた。

「……ぼちぼち」

「少し間があったね。なんか嫌なことでもあった?」

「…いや、これからあるの」

「…この時期は中学校で何があつたかな〜もう何年も前だから思い出せないな」

「……二者面談」

「…えつ。二者面談つて先生と一対一で話すアレだろ?」

「…私は喋ることが苦手だから、あまり自分が言いたいことが相手に伝わらないの」

「…俺と話してる限りでは苦手という感じはしないんだけどな」

それはおじさんとこの1か月で少し親密な関係になつたから喋れるだけ。

「…どういった二者面談になるんだ?少し話してくれ」

「…えつと」

「…なにか困つてゐることはないか?」

「…ありません」

「別に遠慮しなくていいんだぞ。君があまりクラスでほかのこと喋らないの知つてゐるから、何か話しづらいんだろ?」

「…いや、本当にないです」

「……そうか。困つたら遠慮なく、先生に言うんだぞ。できる限りフォローはするし、相談にも乗るからな」

「…その時はお願いします」

「…みたいなかんじかな」

「なんか先生が喋って、それに返事してるだけみたいなの面談だな。まず先生が情に厚そうであんなに良かったな」

「…分からない。最近はいいい人そんな顔の教師がわいせつ行為をすることが増えてるから」

「…まあ、そうかもな。いつの時代も人と罪は隣りあわせだから警戒しとくことに越したことはないかもな」

「でも、本当に優しくして良い人もいるということも忘れてはいけないぞ。その先生だって善意で君のことを気にかけてくれてるのかもしれないからな」

「確かにおじさんが言うことも一理あるかもしれない。誰もがみんな疚しい気持ちで接してる訳じゃない。」

「俺の言葉もすべてが正しい訳じゃないから気にとめておくぐらいの気持ちで聞いておいてくれ」

「…うん、だけどおじさんの言葉は優しいから…好きだよ」

「……そうか」

おじさんは私の方を見て少し照れたように頬をかいていた。

「まったく、君が将来いろんな男を誑かさないか心配だよ」

「…なんの話？」

「いや…こつちの話だ（無自覚なのもたちが悪い）」

「……??」

よく分からない。誑かすとはどういう意味だろ。いや、言葉の意味は分かるけど。

「…おじさんの方はどうなの？」

「ん〜？俺はそうだな…」

おじさんは顎に手を当てながら考えるそぶりをする。

「あくなんかのろけ話になるかもしれないけど」

「かまわない」

「嫁さんと1泊2日の旅行に行った」

「…遠出？」

「いや、車で少しいったところの旅館だからそこまで離れてる訳じゃないよ」

旅行…もうしばらく行ってないような気がする。

「君はご家族とは旅行に行かないのかい？」

「…いかない。もう数年は行ってない」

「…そうか、行きたいとは思わないのか？」

「…とくには思わないけど、綺麗な場所なら行ってみたい」

私は幻想的な景色や純粋にきれいな景色が好きだから、もしそういうところに行けるなら行ってみたい。

「きれいな場所か…バラ園とか植物園とかはどうだ？」

「植物園…いいかもしれない」

静かに花を愛でるのもいいかも。

「ご家族に言ってみたらどうだ？旅行に行きたいって」

「…なんか伝えにくい。私の妹なら遠慮なく言うと思うけど」

「へえ、妹さんがいるのか」

「うん、私の2歳下で小学6年生」

「仲いいのか？」

「…悪くはないよ。だけど私が口下手だからあんまり喋れない」

「家族にまで影響があるのか」

おじさんは少し驚いたように眉が上がっていた。

「だから、私から旅行に行きたいなんて言えない」

「子供なんだから遠慮しないで言ってみてもいいんじゃないか。親というのは自分の子

供の我が儘を聞いてあげるのも親の仕事だから」

「…あんまり子ども扱いされるのは好きじゃない」

「おつとそこはまだデリケートな年頃なんだな。可愛らしい」

おじさんは私のむすつとした顔を見て微笑んでいた。私はおじさんの反応を見てさらに不機嫌になる。

「ごめんって、嬢ちゃんのむすつとした顔が可愛くてな。つい、いじめてしまった」

「…次からは本気で怒るよ」

「お嬢様の気の赴くままに」

おじさんはまるで私をあやすかのように大袈裟なりアクションをする。私はそんな仕草がおかしく思い、くすつと笑ってしまった。

「お！機嫌が直ったようだなによりだ」

「……これはおじさんがあまりにもおかしかったから嘲笑っただけ」

「でも、笑ってくれたのならこちらとしても嬉しいよ」

おじさんはまるで私の気持ちがあつたかのようにこつこつと笑う。…本当にこの人は卑怯だと思う。

「…おじさんは卑怯だね」

「ふつ、大人は卑怯なぐらいが丁度いいんだよ。君も成長していくうちに大人の汚さを

学んでいくのさ」

そうしないと生き残れないぐらいにね。とおじさんは続けた。

「…大人って楽しい？」

「…ん〜そうだな。見方にもよるね」

「見方？」

「そう、例えば君がこのまま中学校を無事に卒業、高校も受かり、高校を卒業するとき。君の周りにはどれぐらいの人がいるかな」

「人？」

「うん、友達や先生、ご家族。そういった人たちが君のことをどれだけ知っていてくれるのか。これは本当に大切なことだよ」

「言い方は悪いかもしれないけど、気が知れた人が周りにいるってことは使える人材がいるってこと。そういった人材は多いに越したことはない」

「そういった人材を高校生のうちにたくさんとは言わないけど5人ぐらいはつくっておいたほうがいいよ。自分が悩んだとき、今言った人たちが相談に乗ってくれる」

「過去の偉人は言った、『人は一人では生きてはいけない』と。俺もここまで生きてきて思っただけそうだなと思っただよ」

「…それは両親も含む？」

「もちろんだよ。君を産んでくれたのはお母さんだし、日夜働いて君の食費や住居、衣服や生活費、学費を払っているのはご両親なんだからね。この時点で君は少なくとも二人の人間に支えられているんだ」

「だから、昔から親孝行はしなさいと言われていたんだ。君ぐらいの歳の子はあまりこういった話をしてよく分からないかもしれないけどね」

「……うん。おじさんの言いたいこと、よく分かった」

「おつーなら、俺が言ったことを簡単にまとめられるかい？」

……えつと、これからの人生で何回も悩む場面が訪れる。だからそう言った時に相談できる人をそばにおいておく。そして、成長するうえで忘れてはいけないのが人は一人で生きてはいけないってこと。自立している人間も一人で生きてるわけではなく、いろいろな人に支えられて生きている。だから、恩返しも含めて親孝行することだけは忘れてはいけない。

「………(ういうこと?)」

私は今考えていたことをおじさんに伝える。

「………ええと、君は本当に中学生か?よくそんな難しい考え方ができるね」

「……間違いなく中学生」

「……それで質問の続き」

「えっと……」

「大人って楽しい？」

「ああ！そうだった」

「つまり俺が言いたいのは、相談できる人っていうのは自分が信頼している人でもあるんだ。そういった人と遊びに行ったり、旅行に行くと本当に楽しいぞ」

「だから、君も君なりのやり方で信頼できる友人をつくっていく努力をしたほうがいいよ。これは少し先に生まれたおじさんのアドバイスだ」

「自分のやり方で探す……」

「……うん。頑張ってみる」

「そうか、がんばれよ」

そう言っておじさんは私の頭をそっと撫でてくれた。

「……」

「おっと嫌だったか」

「ううん、驚いただけ。それにおじさんの手、温かい」

「……そうか」

私はしばらくおじさんに撫でられていた。おじさんは頭から手を放し、手首にはめている腕時計を見た。

「もうこんな時間か、そろそろ出社しないと遅刻しちゃうな」
「…ほんとだ」

もう時刻は7時50分。いつもは20分ぐらい前には別れているので少しタイムオーバーしている。

「じゃあ、今日はここまでだな」

「うん、私もそろそろ行かないと…遅刻」

「それはお互いに変だ。じゃあ、俺は行くね」

「…私も学校に行くよ」

私とおじさんはベンチから立ってお互いを見て…

「また、明日な!」

「…うん、また明日ね」

別れを告げ、それぞれ別の出入り口から公園を出るのだった。

春について おじさん視点

Chapter 春について

俺は嫁さんに行つてくると告げ、玄関を開けて家を出た。俺はぼんやり空を見ながら、春だというのに冬の寒さが続いているなど自然界に対して愚痴を言っていた。まあ、まだ朝の6時過ぎだからというのものもあるだろうけど。

俺は目的地である会社：ではなく、公園に向かつて歩いている。それはある少女と出会ったためだ。ある少女：名前は聞いてないし、なんか今更聞く気にもならないが、あの子は少し変わった子だなとは思う。あの子は、俺の相談を真摯に受け止め、それに対して自分が言葉で表現できる精一杯の助言をしてくれた。あの言葉に俺は助けられたし、とても感謝している。その点を踏まえて、大人っぽい子だなとは思う。子ども扱いされると不機嫌になるのは子供っぽくて少し面白かったけど。

「つと、考えてる間に着いてしまった」

俺は目的地の公園にたどり着いた。周りを見渡しても人一人いない。6時半前だからいるとしたら早起きなご年配の方しかいない。まだ、少女も来てないみたいだ。

「さて、朝のブレイクタイムといきますか。なにもしてないけどな」

俺は、自販機で缶コーヒーを買いベンチに腰掛けた。その際によいしょと言っ
てしま
い、なんだか老けたなと思った。そんなことを思う自分がなぜか虚しい。

「ん…あの子はもうそろ来るな」

チラツと公園に立っている時計台を見て時刻を確認する。針の位置は、長い針が6を
指しているため、6時半ぐらいだというのが分かる。大体この時間帯に少女はここに来
る。

「ん…来たか」

噂をすればなんとやら。黒髪を背中ぐらまで伸ばした少女が公園の入り口から
入ってくる。その少女は、真つ直ぐにこちらに歩いてきた。そして…

「…おはようございます」

とペこりと頭を下げた挨拶をした。

「ああ、おはよう。今日も早いね、眠くないの？」

「…もう、習慣になってるから大丈夫」

「それは良いことだ。おじさん、年々朝起きるのがつらくてなってきたね。君のことを
見習わなければいけないな」

ほんと歳を重ねると朝起きるのがつらいのはなんとかならないものか。

「さ、立ってるのも疲れるだろ？早く座りなさい」

「…言われなくても座るよ」

少女は、スカートの後ろを臀部の下に来るように手でおり、ゆつくりと腰を下ろした。もう、少女が俺の隣に座るのはすっかり慣れたな。

「…おじさんはまた缶コーヒー？」

「ん？まあね、これを飲まないと朝が始まった気がしなくてね。家でも飲んだんだけどね」

「…ブラックコーヒーを平気で飲めるんだ」

「大人でも苦手な人は飲めないと思うよ。そもそも飲もうとしないかな」

「…私はまだまだ舌が子供だからコーヒーは苦くて飲めない」

逆に少女ぐらいの年の子が、ブラックコーヒーを喜んで飲んでいたらそれはそれで引くと思うんだが…というか、その子の将来を心配するレベル。

「ブラックコーヒーは謂わば大人の飲み物さ。君が急ぐ必要はないよ」

「それにコーヒーは糖分を含んでいるからね。あまりたくさん飲むと、糖尿病になる可能性もある。最近、20歳未満の糖尿病も注視されているからね」

「…私、普段はお茶やお水しか飲まないの。ジュースはあまり飲む気がしなくて」

「へえ、それは珍しいね。俺が君ぐらいの頃はよくジュース飲んでたな」

オレンジジュースとか炭酸飲料とか。正直、お茶とかあまり飲みたくなかったな。部

活の時はスポーツ飲料を水筒に入れてたし。

「お…少し暖かくなってきたな。やっぱり日が出ると春の暖かさを感じるな」

「…うん、私も春は好き。暑くもないし、寒くもない。まだ、少し寒いけど」

「俺は、冬生まれだからって訳じゃないんだけど、寒いのは全然大丈夫なんだよね」

「…暑いのは苦手？」

「イエス。もう、夏は汗だらだら。タオル必須だよ」

そう考えると俺は秋のほうが好きかもしれないな。いや、秋は夏の暑さが残るし、やっぱり春かな。

「桜は見たかい？」

「…私がどこに通っているか忘れたの？」

「いや、見たこと前提で綺麗だったか？って意味だよ」

「…そういうこと。う…ん、綺麗だったよ」

「そうか、俺も会社に行く途中の道に桜が植えてあるんだけど、なんだか夢くてとつても綺麗に感じたよ」

桜って2週間ぐらいしか咲かないのにも関わらず、人の心にやけに残るんだよな。まさに、桜に心を奪われたって感じだな。

「中学校で春と言えば、クラス替えか。仲良い子とか、好きな子のクラスになれたか」

「…おじさんが私に何を期待しているかは分からないけど、私は好きな子はいないよ」
「ありや、残念。おじさんに淡い恋を教えてくださいよ」

「…おじさんには婚約者がいるじゃない」

「俺の場合はもう実ったものだから、淡くないの」

言い得て妙である。にしても、この少女が目を引き男子はいない訳か。それにしても、この子はモテるのかな？俺が見る限り、結構可愛い部類に入ると思うんだが。

「君は、告白されたことはないのかい？」

「……ないよ」

まじか…嬢ちゃんの学校の男子どもは見る目がなさすぎだろ。

「…こんなに可愛いものにな」

俺はボソツと呟く。

「……ツツ!!」

「…ん？」

少女を見ると、顔を下げているから表情は分からないが、耳が真っ赤になっていた。

（ありや、聞こえてたか）

俺は、少女に聞こえない声量で呟いたつもりだったが、少女には聞こえてしまったらしい。

「ごめんな、本音がポロっと出てしまった」

「……」

「照れた顔も可愛いな。言われ慣れてないのか」

「……そんなこと言われたことなんてないし、慣れるなんてことはないよ」

「……というか、おじさんはデリカシーが無さすぎ」

「嫁さんにもたまに言われる」

少女はまだ照れが残っているのか顔を少し赤くして、俺をジト目で睨んでくる。性癖がやばい奴なら今のこの状況はとても幸せかもしれないな。俺にはそんな性癖はないし、まず嫁さんがいるからそんなこと感じないけど。

「話戻すけど、仲良い子とかいないのか？」

「……いるけど、今回は別のクラスになった」

「ありや、それは残念だったな」

青春あるあるだけど、クラス替えて仲良い子と離れるとやけに寂しいんだよな。

「それにしても、中学か」

「……懐かしい？」

「そりゃね、何年前だろ？……今が24歳だから、9年前？」

うん、9年前なら懐かしい訳だわ。

「君は中学二年だったか、二年生か…なにがあったかな」

「…覚えてるものなの？」

「んにや、あんまり覚えてない」

中学はやることがつまらなかつたしな。制限とかもいっぱいあったし。

「…おじさんが高校生になった時のこととか聞かせてほしい」

「ん〜高校か…」

俺は記憶を遡り、高校の時を思い出す。

「ああ〜合格発表の時に制服とシューズの採寸とかしたな」

「…へえ〜採寸なんてするんだ」

「ほかの高校がどうかは知らないけどな。そう考えると懐かしいな、その時は同じ中学の奴と行ってな。二人で番号見て喜んだもんだ」

もう大学が上がってからは子供って感覚がなかったから高校が懐かしく感じる。

「…おじさんにも仲の良い友達とかいるんだ」

「なんでそこに驚いているかは置いとくとして、なんで高校なんだ？」

少女は自分が歩む将来が不安なのだろう。この時期の子供は少しずつだが、教師や親を通じて自分の将来を考えるようになるからな。かくいう俺もそうだったし、この少女もそうなのだろう。

「…特に理由はないかな、興味本位で聞いたただけだし」

「あつ…そうなんだ」

俺の予想は的外れでした。

「…他には？」

「ん〜楽しかったことなら、文化祭かな。出し物は飲食系だったんだけど、友達と一緒に女装したりしてな。当時はやけくそ気味でやってたけど今となつては良い思い出だな」

「…おじさんの女装、見てみたいかも」

「やめとけ、傷つくから…俺が」

それぐらい酷いものだったからな。当時はよくやったものだと自分を褒めてやりた
い。

「ん…もうこんな時間か。君と話しているとあつという間だな」

「…確かにおじさんと喋っていると時間が経つの早い」

時刻は7時半。もういい時間帯だ、会社に向かわねば遅刻してしまう。まあ、そんな慌てる時間でもないけど。

「じゃあ、今日はこれぐらいでお別れだな」

「…うん、次はいつ会えるかな」

少女は俺を見上げる形で見つめてくる。これが、上目遣いか…まあ、俺が座高も身長

も高いから当たり前だけど。

「そうだな…正直分かんけど、できるだけ毎日来たいって思ってる」

「…私に会いに？」

「…そうだと云ったら？」

「…嬉しい反面、それは浮気なのではと思う」

「バツカ…中学生に欲情を抱くわけがないだろ」

俺は少女の頭を少しだけ強めに撫でて、立ち上がる。

「じゃあ、また明日な」

「…うん、また明日ね。おじさん」

少女は右手を少し上げながら控えめに手を振った。俺はそれに見送られる形で公園から出ていくのだった。

少女の日常

Chapter 少女の日常

私は椅子に座ってぼんやりと窓を眺めていた。外はザーザーと雨が降っている。まだ、梅雨を迎えていないというのに最近は何ばかりだ。こんなに雨ばかり続くと無意識にため息が出てしまう。

「どうしたの？そんなため息ついて？」

私の前に座っていた女の子が話しかけてくる。この子は新しいクラスになってから出来た友達だ。表情があまり出ない私に、話かけてくれる優しい子だ。

「…いや、最近雨ばかりだから」

「ああ、確かに雨ばかり続くとなんかやる気出ないよね。アタシも濡れるのやだし」
彼女はうんうんと頷く。女子限定という訳ではないけど、雨はイヤな人が多いと思う。だれが好き好んで雨の中を歩きたいと思うだろうか。そんな人はよっぽどの狂人だ。台風の日には仕方ないと思うけど。

「それに…」

「うん？」

「…公園にも行けてない」

「公園？遊ぶの？」

「…うん、そうじゃなくて」

私は彼女に、私が普段している日課のことを話す。

「へえ、毎朝、公園のベンチで本をね。なんかすごい優雅だね！」

「…そんなこと気にしたこともない」

「そう？アタシはそう思うけどな。でも、毎朝なんて偉いね」

「…もう習慣だから。それにあの人も会えてない」

「あの人？それって男の人？」

「…そうだけど」

そのことを聞くと彼女はニヤニヤしながら私を見る。…これ絶対勘違いされてる。

「…先に言っておくけど、あの中は大人でもう婚約者もいるから。だから、あなたが想像しているようなことは絶対ないから」

「ありやそうなの？アタシはてつきりあなたがその人のことを好きなのかと思っちゃった」

「…人としてはすごく尊敬するし好きだよ」

「へえ、男の話がミミリもなかったあなだがそこまで好意をもつなんて珍しいわね」

「…そんな噂があったの？」

「あつたよ。あなた結構可愛いのに男の話が欠片もないから女の子が好きなんじゃないかってね」

「…勝手にアブノーマルにしないでほしい」

私が、女の子が好きなんじゃないかって噂があつたから男子から告白がなかったのか？…別に無いほうがいいのだけど。そう考えると、私にとっては好都合な噂なのかもしれない。

「話を戻すけど、その男の人といつ会つたの？」

「…会つたのは最近だよ」

私はおじさんとあつた経緯を軽く彼女に話した。

「…あなたつてホントに中学生？年齢誤魔化してない？」

「…なんでおじさんと一緒のことを言うの」

「いや、だつて言動が中学生じゃないもん」

「…私は中学生」

なぜ私の評価はそんなに高いのかが理解できない。

「なるほどね、まあ最近は雨ばかりだし会えないのは仕方ないね」

「……うん」

私は少しモヤモヤした気持ちで一日を過ごすのだった。

「じゃあ、これでSHRは終了にする。皆、部活のあるものは一生懸命に励み、無いものは気をつけて帰るように」

先生の合図と共に、クラス内が一気にざわつく。私はその騒然から逃げるようにそそくさと教室から出た。あの子と話していた時は午前で、午後になると雨の勢いは収まり止んだ。私はその事に少し嬉しくなり、心が少々弾んでいた。

（明日、久しぶりにおじさんに会えるかなあ…）

ほんの一ヶ月ぐらいの付き合いなのにここまで特定の人に会いたいと思ったのは初めてだ。これも、あのおじさんのせい？おかげ？かもしれない。

「…ふふつ。へんなの」

私は今まで感じたことのなかったこの気持ちについて笑ってしまう。

（何だろう、この気持ち…）

昼前に友達と話していたことを思い出してみた。

『アタシはてつきりあなたがその人のことを好きなのかと思っちゃった』

『…人としてはすごく尊敬するし好きだよ』

確かにおじさんのことは好きだ。私の知らないことをたくさん知ってるし、優しく教えてくれる。だけどこれは異性的な意味の好きとは違うと思う。なんだろう？ わからない。

(今は分からなくてもいつか・・・)

私はこの気持ちがいまのまま帰路を歩く。しかし、心はこの空と同じように青く晴れやかだった。

私が家に着いたのは、学校を出て10分ほどたった後だった。

「……ただいま」

私が玄関で靴を脱いでいると二階から下りてくる足音がした。私は後ろを振り返った。そこにいたのは私の妹だった。

「お姉ちゃん、お帰り！」

「……うん、ただいま」

妹は笑顔で私に駆け寄り、私の顔を覗き込む。

「あれっ？ なんかお姉ちゃん機嫌良い？」

「……どうしてそう思うの？」

「だって微妙にだけど笑ってるんだもん。お姉ちゃん、あんまり表情でないからびっくりしちゃった」

妹はクスッと微笑み私を見つめる。んっ…機嫌が良い?…別にそうでもないと思うけど。

「…別にそんなことない。気のせい」

「ええ、絶対笑ってたよ。あつ、お姉ちゃん!…もうっ」

私は妹をチラッと見て、階段をあげり自室に入る。入った先は、私がもう慣れ親しんだ風景や匂い。やはり自室が落ち着く。

「笑ってた…か」

私は先ほど妹に言われたことを思い出し、部屋に置いてある姿見を見た。もちろん鏡には私が映っている。鏡の中の私は相変わらずの無表情だった。

「……ん」

私は自分の頬を横に引っ張り笑ってみる。出来上がったのは引き笑い。妹やおじさんのように笑顔をつくれないう自分が嫌になる。

「…着替えよう」

鏡から離れて私はセーラー服を脱いで、私服に着替えていく。着替えるのはあつという間で脱いだ制服をハンガーにかけておく。私はひとつ息を吐き、ベッドに横になる。ベッドは悲鳴を上げるかのようにギシギシと音を立てる。

「…少し、休もう」

私は目を瞑り、しばらくして意識を落とした。

私が目覚めたのは妹がご飯だと起こしに来た時だった。私は寝惚け眼を擦りながら、リビングがある一階に下りていく。リビングに入るとお父さんとお母さん、妹が席に座っていた。どうやら待たせてしまっていたようだ。

「……めんなさい、待たせた？」

「ううん、今できたから大丈夫よ」

「なんだ、寝てたのか？」

「……少し」

私はそう答えてお父さんの隣の席に座った。座席の位置は、私の隣がお父さん、向かい側に妹、その隣にお母さんといった感じだ。

「では、いただきます」

「いただきます」

「……いただきます」

お父さんの挨拶で食事をとり始める。今日のメニューは、ギョーザ、ほうれんそうのおひたし、旬であるタケノコの煮物。後は、ご飯とみそ汁。

「どう？おいしい？」

お母さんが味の感想を求めてくる。

「うまい具合に焼けたギョーザがうまいな」

「…旬物のタケノコもおいしい」

「そう！なら良かった」

その後私たちはご飯を食べ終わり、各々が自由に過ごす。ちなみに私は、椅子に座って本を読んでいる。内容は、『日本の歴史 ミステリー』だ。

「あんた、本読むの好きねえ…」

「…知識になるってこともあるけど面白いから」

「私には無理だわ。そもそもお母さんは、本を読むのがあまり好きではなかったからね」
「それにその歴史の本？…文字ばかりでしょ？目が疲れちゃって読む気にならないのよ」

「…ファッション雑誌とかは平気なの？」

「まあ、読まないと流行についていけないし女を磨くにはそういったものを読まないからね」

「あんたもそういう難しい本を読むのも大事だけど、たまにはファッション系の本も読んでみなさいよね」

「…気が向いたらね」

「もう、いつまでもお母さんが服を買う訳にはいかないんだからね」

お母さんはため息をつく。それに…とお母さんは言葉が続ける。

「あんたが毎朝会ってる人にも顔合わせできないでしょ」

私はお母さんが言った一言に今まで本に向けていた視線をお母さんに向ける。

「何で知ってるって感じの目だね」

「…なんで知ってるの？まさか…」

私はお母さんをジト目で見つめる。お母さんはツウーと横に目をそらした。

「…やっぱり後を追ってきてたんだ」

「違うのよ！…いや違うないけど、理由があるの！」

「…理由？」

「いやね、今までなんも変化がなかったあんたが少しうれしそうに朝出ていくんだもん。

そりゃ、親なら気になるわよ」

「…表情に出てるの？」

「最初は驚いたけどね、でもいい変化だなど思ってそのままにしたの」

「でも、まさかね…」

「………？」

「あんたに男ができたなんて……しかも相当年上」

「……ッ!？」

この母は何を言ってるのか私には分からなかった。いや分かりたくなかったが、こんな時に限って少し恥ずかしくなり頬が熱くなるのを感じた。

「おっ! あんたの赤面なんて珍しい。写真撮っておこ」

お母さんは即座に携帯のカメラを起動して、パシャリとシャッターを切る。……隠せなかった。

「見てみて、お父さん! この子の貴重な赤面した写真!! すごく可愛い!」

「……ッ。お願いだからやめて」

ソファで横のなっていたお父さんがむくりと起き上がり、こちらに来る。そして写真を見る。

「どれどれ……おおくよく撮れてるじゃないか! 可愛いぞ」

「だよね。……あんた顔は可愛いんだからおしやれ意識しないとあの男の人の気を引けないわよ」

「……男だどっ! おい、話を聞かせろ!!」

「……お願いだからすこし落ち着いて」

結局、私はおじさんとのエピソードを両親に話すことになり、私が就寝したのは12

時を過ぎた後だった。

梅雨について おじさん視点

Chapter 梅雨について

「なぜ…雨は降るんだろうな」

「……いきなりどうしたの？」

俺は隣に座って本を読んでいる少女に向けて喋りかける。

「いや、昔から雨は天からの恵みだの言われてるけどさ、天からの恵みで水害起こってたら最悪だよな」

「…それは昔のこと」

「まあね。昔は今より降水量が少なかったらしいし、地域によってはそれこそ全く降らない地域もあっただろうしな」

それなら雨は恵みと言われても納得ができる。

「ていうか天気予報で梅雨入りしたって言ってたけど、本当に梅雨はイヤだな」

「…みんなそう思ってるよ？」

「だろうね、特に社会人はイヤだと思うよ。雨だとスーツ着てるからすぐに蒸れるし、電車だって遅延しやすしいしな」

「…私も制服が濡れるからあまり好きじゃない」

「服が濡れるのは困るよな」

「…うん」

俺もスーツの裾が濡れると嫌だな。俺は久々に顔を見せた太陽を見据えながら少女と話を続ける。

「…なにか雨に関する面白い話ないの？」

「ん？面白い話？」

「…うん」

「んくそうだな」

俺は頭の中を整理しながら、引き出しのネタを引っ張り出す。

「あれは俺が四、五歳の時だったかな」

「たしか五月で、雨が降った後の夜だったんだ。まあ、まだその時も降ってたけどな」

「で、俺は父さんと一緒に近場の公園にセミの幼虫を捕まえに行つたんだよ」

「…幼虫？」

「ん？見たことない？セミの抜け殻って夏場になるとそこら中にあるけど、もちろん抜ける前にはセミが入ってたんだ」

「で、セミは六月の終わりから七月にかけてかな。地面から出てきて脱皮するんだ」

「そのタイミングを狙って五月ぐらいに捕まえに行つたんだ」

俺はその時の光景を思い出しながら語っていく。

「…でもどうやって見つけるの？」

「最初は地面…要するに土だね。幼虫が出た跡を探すんだ」

「で、穴を見つけたら近くの木を見渡していく」

「これがまた大変だね、穴があつてももう羽化した後の幼虫だったりするからなかなか見つからないんだ」

「話戻すけど、その日の夜も探しに行つたんだよ。で、まだ俺は四歳ぐらいだったから背丈も小さい訳よ」

「地面との距離も近いから視野が狭くてな、目の前にいた存在に気付かなかった」

「…な、なにがいたの？」

少女は珍しくびくついたような表情をしていた。俺はにやりと笑って少女に問う。

「なにがいたと思う？」

「…わからない」

「20cmぐらいのウシガエル」

「…ウシガエル？」

「うん、俺その時片手に懐中電灯を持って穴を見つけてるのに必死だったんだよ」

「で、前を照らすとそこそこでかいカエルがいたから驚いてな、大慌てで逃げちゃった」
「追いかけてきた父さんがカエルだったって知らせてくれたからもう一回戻って確認したら件のカエルだったわけさ」

「…ふーん、結局幼虫は見つけられたの？」

「なんとかね、それを虫かごに入れて家に持ち帰ってカーテンにひっつけて観察してたよ」

「いやーあれは一度は見たほうがいいね！ちようど羽化するタイミングが夜が明ける時
でねー」

「セミの羽は羽化した時は緑色なんだけど、朝日と重なってまるでエメラルドみたいな
輝きだったからすごく印象深く覚えてるんだよ」

「まあ、俺がセミの幼虫を羽化させたっていうお話だよ」

俺は一息ついたところで缶コーヒーを飲む。

「…でも私、虫は苦手だから」

「女の子は苦手なのかな。でも安心して」

「……なんで？」

「今は俺、セミに触れないから！っていうか虫自体苦手だから！」

「…そこは自信満々に言うべきではないと思う」

少女は呆れたような目でこちらを見てくる。仕方ないだろ、見た目が気持ち悪いんだから。

「…君はないのかい？」

「…私は…特にない」

「そうか、まあこれから面白い体験もするさ」

…比例してつらい体験もすると思うけど、この子にはそう言ったつらい体験も乗り越えて欲しいね。

「ところで…」

「…ん？なに」

「君は今、何の本を読んでいるの？」

少女が何の本を読んでいるのかが気になったので聞いてみる。

「…【日本の歴史 ミステリー】だよ」

「歴史ね…興味あるの？」

「…少しだけ」

「どの時代が好き？」

「…面白いのは戦国だけど、関心があるのは江戸」

やっぱり戦国時代はいろんな武将がいたから面白いよな。江戸は現代日本の基礎を

つくりあげた時代だしどちらも重要な時代であることは間違いない。

「ミステリーていうとあれか。明智光秀の本能寺の変とかか？」

「…うん、それもあるよ。他には新田義貞の太刀とか、徳川埋蔵金の謎とか」

少女はいつもよりも嬉々とした表情で話してくれる。それが信頼されているみたいで嬉しくなる。

「へえー俺はあんまり日本史に詳しくないから為になるな」

「…私もそこまで詳しくはない。授業も今は明治時代だし」

「懐かしいな日本史」

「…覚えてる？」

「ん、まったく覚えてない」

「大化の改新が中大兄皇子と中臣鎌足が起こしたとか大まかなことしかわからんな」

「…単語とか年号？」

「そうそう。やっぱり当時なんかテストに出るところを押さえればいいのか考えてたしな」

で、テスト終わったら記憶がほぼなくなるんだよな。まあ、一夜漬けのテスト勉強なんか短期記憶でしかないし、覚えられるわけないよな。

「…どんな年号覚えてるの？」

「…すうーえつと・・・645〈無事故〉の改新。710〈なんとでつかい〉平城京。794〈鳴くようぐいす〉平安京」

「1192〈いい国〉の鎌倉幕府。1467〈ひとよむなしい〉応仁の乱。1582〈以後、犯人は分ならず〉本能寺の変。1590〈戦国王〉豊臣秀吉、天下統一。えーと：1914〈いくとし〉の第一次世界大戦。1945〈遠く死後まで安らかに〉太平洋戦争終結。・・・こんな所かな」

「…結構覚えててびっくりしてる」

「記憶力は良いほうだしな。ちなみに人物は全く覚えてない」

「…一番好きだった人は？」

「マツカーサー」

「…なぜ」

「日本に降り立つ姿が堂々としててカッコいい」

「…当時の人からしてみれば恐怖の象徴だっただろうけどね」

「違ういな」

「さあ、もう時間だ。久しぶりに会えて楽しかったよ」

「…うん、私も」

少女は微かに微笑んだ。最近では、少女の微かな表情の変化も分かるようになってきた

な。

「…ははっ」

「…っ！どうしたの？」

俺は無性に嬉しくなつて少女の頭を撫でた。

「いや、なんでもないよ」

「……そう」

俺は満足して少女の頭から手を放す。

「じゃあ、行くね」

「……またね」

「…ああ、またな」

そうして俺は少女に手を振つて公園を後にしたのだった。

熱中症について 少女視点

Chapter 熱中症について

じめじめとした空気にうんざりしながら、今日も今日とて本を読む。隣にはもうすっかり見慣れてしまった一人の男性が座っている。

「……」

「……ん？」

私がじっと見つめていると私の視線に気づいたようでおじさんは首を傾げて私を見る。

「どうかしたかい？」

「……いやなにも」

「そうか……」

「このなにもない空間が妙に心地いい。」

「……ああ、そうだ」

「……？」

おじさんは何か思い出したのかカバンを開けて中を探る。おじさんが取り出したの

はひとつの本だった。

「君、本が好きだろ？これ俺が昔読んでた本なんだけど良かったら読んでみる？」

「…いいの？」

「もちろん。そのために持ってきたからな」

「…ありがとう、それじゃ遠慮なく借りるね」

「ああ、読み終わったら感想なんかくれると嬉しいな」

「…ん、必ず言うよ」

おじさんは缶コーヒを飲みながら笑う。私は渡された本のタイトルを見る。

「…この本って」

「ん？それ、結構有名だと思うけどね」

「…私も少しだけ知ってる」

「昔、マンガで出てて少し前に小説になったんだよ」

確か、王子様に憧れた女の子がある男性に助けられて、その人の姿を追いかけて自衛隊に入って、その男性と七転八起しながら仲間と共に成長していく物語だったような気がする。

「その本、物語性もあって面白いよ。女の子が好きな恋愛要素も強いしな」

「…おじさんはこの本読んだの？」

「もちろん、このシリーズは最後まで見たよ。映画もやったほどだしね」

「…映画もやってたんだ」

「確か、アニメもドラマもやってたよ」

「この作品はどうやらかなりのヒット作品らしい。まず、映画を放映している時点で注目されているのは間違いのないんだけど。」

「ま、ゆつくり読んで感想聞かせてね」

「…うん、そうする」

私は本を鞆に入れる。

「それにしても暑いな…」

「…うん、暑いね」

おじさんはカバンから扇子を取り出して扇いでいる。

「ん、朝はまだそこまで暑くないから扇子も役に立つな」

「…昼はそこまで？」

「うん、ただ熱風を送るだけ」

「…それはきついね」

まだ風があるだけ助かるけどね、とおじさんは扇ぎながら笑う。

「この季節、小学校は運動会を開催するところが多いみたいだけど子どもたちは大変だ」

ね」

「…熱中症が怖い」

「そっか、君も小学生ではないにしろ例外ではないのか」

「…うん」

「でも、学校側も熱中症を危惧して半日運動会なんてものをしてしているみたい」

「…半日？」

「そう、日が強くなるのつて基本的に午後からじゃん？だから、午前中にある程度のプログラムを終わらせてしまうみたいだよ」

「…それが熱中症対策？」

「…俺は専門家じゃないから実際に効果があるかは分からないけどね。だけど、名古屋の方ではこれを実行する小学校が大半みたいだから実証はされてるんじゃないかな」

「それに小学生はまだ体が出来上がってないから熱中症になりやすいんだとか」

「まあ、大人でも油断したらすぐに熱中症になるし、子どもがなっても何ら不自然ではないよ」

「…おじさんはなったことある？」

「俺はまだないかな」

「…そうなんだ」

「君はあるかい？」

「…私もまだない」

私はフルフルと首を振る。

「俺の友人に熱中症になったことがあるやつがいるんだが、そいつが言うにはまず視界がぐるぐる回って最後には目を開けている感覚はあるのに何も見えならしい」

「…怖いね」

「で、体に力が入らなくて立とうと思っても立てないみたいだよ」

「怖いよな、もし熱中症を発症したのが駅のホームとかだったら身の毛がよだつよな」

「…考えたくもない」

「だな…んく!!」

おじさんは両手を組んで伸びをする。ぱきつという音が耳に入る。

「…骨」

「ん？骨の音鳴らすのはよくないって？」

「…うん」

「ははっ、分かってはいるんだけどね。つい、いつもの癖でやつちやうんだよ」

「なあ、この前は俺がいろいろ話したからたまには君が話してみないか？」

「…私が？」

「そうそう。なんでもいいよ」

「…そういわれると思いつかない」

「ん〜ならなんかお題欲しい？」

「…出来れば欲しい」

「じゃあ、家族の思い出とかで」

家族の思い出…

「…妹との思い出…でいい？」

「おお〜妹さんとの思い出か」

「…うん、えつと…2年前ぐらいかな」

「…私は6年生で、妹が4年生。それで、両親が仕事で夜まで帰れなくなったの」

「ご両親は共働きなのか」

「…うん、それでその時は平日だったから昼は学校があったから問題なかったの」

「…それで問題の夜になって晩御飯どうしようっていう話になった」

「…もちろん妹も私もまだ料理があまり上手じゃなくてお母さんが作ってたのを思い出しながら見様見真似で作ったの」

「…結局、その時の御飯がご飯とみそ汁ともやし炒めだけだった」

「ははっ！まるで男の晩飯だな」

「…そう言われても仕方ない」

私はひと息ついて…

「…これが妹と初めて一緒に作ったご飯の思い出かな」

「へえ、今は料理どうなの？」

「…今はそこそこ」

「ちなみに得意料理は？」

「…八宝菜」

「お、いいね！」

おじさんは笑顔で私のことを褒めてくれる。

「…おじさんはなにか料理できるの？」

「俺は、ニラレバ炒め!!」

「…おいしいの？」

「あれえ？ニラレバ炒め食べたことないの…って中学生が食べたことあるほうが逆に珍しいのかな」

「えつとね、ニラは分かるよね？」

「…うん」

「ニラとレバー、人参とかもやしと一緒に炒めたものかな」

…おいしそう。今度お母さんに頼んで作ってもらおうかな。

「さて、もう時間だし仕事に向かいますか」

「…うん、おじさん」

「ん？」

「…今度、お母さんに頼んでニラレバ炒め作ってもらおうよ」

「おお！是非食べてみてください！おいしいから」

「…うん」

「じゃあ、行くね」

「…んっ、またね」

「ああ、またな」

おじさんを見送り、私も学校に足を向けるのだった。

感情について おじさん視点

Chapter 感情について

「そういえば知ってるか？」

「…なに？」

少女は俺の問いかけに首を傾げた。

「感情の表れて、「何かがあつて感情が出る」か「感情が出て、なんらかの行動に出る」かの2つらしいな」

「……？」

「ああ…よく分からなかったか。要するにな」

人の感情というのは、「笑うから楽しい」と「楽しいから笑う」の2説がある。現代的に考えると後者の方が選ばれる可能性が高いだろう。面白いから笑う、悲しいから泣く、興奮するからはしゃぐ。感情というのは表情の後付けなのだ。

「まあ、その2つの説があるんだけど俺的には前者の説の方が人間の本質に近い気がするんだよね」

「…私は後ろの方」

「ほお…なぜだい？」

「…よく分かってないけど、人って楽しいから笑う」

「そうだね、大体の人はそう答えるだろうね」

「じゃあさ、多分前者の方がよく分かってないと思うから例えを出してあげよう」

「…うん、欲しい」

前者の説…末梢起源説と後者の説…中枢起源説の違いは、刺激があつて表情に出るか、感情が出て表情に出るかの違い。

「末梢起源説の方でよく取り上げられているのは『吊り橋効果』だね」

「…揺れてる橋で告白すると成功しやすいっていうあれ？」

「うん、合ってるよ。あれは要するに『ドキドキしてしまうから、相手のことが好き』と

勘違い…なのかな？そう思ってしまう」

「今ので中枢起源説の方を例えると、『相手のことが好きだから、ドキドキしてしまう』というのかな」

「…なるほど」

「分かってもらえたようだね」

「まあ、これって恋愛漫画でありそうだね。交差点でぶつかるやつ」

「…ぶつかった衝撃でドキドキしてしまったから、相手に好意を抱いてしまう？」

「極端に言えばそういう感じ」

「…でもなんでこの話を？」

「ああ、この前ドラマで三角関係泥沼恋愛ドラマを嫁さんと見てな。そういうえば、大学でこういつたの習ったなあって思ってたさ」

「…よくわからない、どういうこと？」

「ドラマのセリフで、婚約者がいるのに婚約を迫られた男の人が心理カウンセラーの人に相談する場面があつたんだが、『取られて本当に悔しい人を選びなさい』って言われたんだよ」

「…そういうこと」

「だからこの感情の話を出したんだ」

彼女は少し考えて俺を見据える。

「…おじさんは取られて悔しい人って、やっぱりお嫁さん？」

「当たり前だな！俺の嫁さんは別嬪さんだから一番悔しいな」

「君はいるかい？取られて悔しい人は」

「……私は家族」

「欲張りさんだね」

「…だって本当に大切だから」

「……」

(良い子に育ったもんだね…この子の両親は育て上手だな)

彼女は両手を膝の上で頑なに握っている。その様子から、彼女が本当に家族が大切なのだと伝わってくる。

「その気持ち、君が大人になっていくと同時に薄れていってしまうものだ」

「だから、君にはいつまでもその気持ちを大切にしていってほしい」

「…うん、言われなくてもそうするよ」

彼女はこくつと頷き、少し微笑む。

(ああ、やはりこの子の思いは本物だ)

「…んう〜」

彼女は少し疲れたのか伸びをする。

「肩こりかい？」

「…そう、かも？最近はおじさんに渡された本とか別の本を読んでるから」

「ああ、そうか。疲れたと思ったら肩を回さないといけないぞ」

「凝ったままだと余計に肩こりがひどくなるからな」

俺はぐるぐると肩を回しストレッチする様を彼女に見せる。彼女は頷き、俺と同じように肩を回す。

「俺も最近はずスクワークばかりで首と肩が痛いんだよなあ」

「…そうなの？」

「大人になると必然的に肩こりが激しくなるんだ」

「でも自分でほぐしてもなかなか治らないんだよ。首と肩こりだけは他の人にほぐしてもらったほうが気持ちいいし、早く治る」

彼女はそれを聞くと、すつと立ち上がりベンチの裏側に回り俺に背後に立った。

「んー？どうしたの？」

「…さつき、人がもむと治るって言ったでしょ。ほぐしてあげる」

「えっ？わざわざいいよ、それに悪いし」

「……私が勝手にするからおじさんはじっとしてて」

「…あ、はい」

（へんなどころで強情なんだな）

彼女は俺の肩をコンコンとたたき始めた。

「…たたくより揉んだほうがいい？」

「ああくどちらでもいいんだができれば頼む」

「…ん、分かった」

…嫁さんにも偶には揉んでもらおうかな。彼女の肩もみは若干力足らずで弱い。

だが、それが無性に気持ちよく感じる。

(これが人の温かさなのかな)

「…おじさん、どう?」

「……」

「…おじさん?」

「あ、ああ…すまない。気持ちよくてついな」

「…そう、嬉しい」

彼女の表情は見えないが、抑揚で嬉しそうというのは伝わった。

「あいたた!」

「…あつ、ごめんなさい。痛かった?」

「ううん、たぶん結構凝つてた部分刺激された反動だと思う」

「…ならよかった」

「もう大丈夫だ。ありがとう」

「…もういいの?」

「ああ、君が揉んでくれたから楽になったよ」

「…どういたしまして」

「どうだい? 君も揉んであげようか」

「…私はいいい」

彼女はそういつて座りなおす。

「遠慮することないのに…これでもマッサージは上手なほうなんだぞ」

「…誰に言われたの？」

「両親だけだ」

「…あまりあてにならない情報」

「おつ、信用してないな」

「…そもそも私はそこまで肩凝ってないから」

「まあ、あまり若いうちに筋肉を強くもみすぎるのも良くないと聞いたことがある気がするし、今回はやめておこうか」

「…うん」

「さあ、肩の疲れも取れたことだし仕事に行ってまた疲れてきますか」

「…それじゃ私が揉んであげた意味がない」

「少しでも疲れがとれたんならそれは意味のある行動だよ。それに対して俺は君に感謝しているしな」

「…そう」

俺は腰に力を入れ、よいしょと立ち上がる。

「じゃあ、またな」

「…うん、またね」

彼女は小さく手を振る。その姿が妙に大人な印象を受けた。

「おう」

俺は片手を少し上げて振り返した。また、今日が始まる。

初夏について 少女視点

Chapter 初夏について

春の暖かさも過ぎ、今では肌に刺さるような暑さを放つ太陽が輝いている。私の制服も夏服の物に替わり、いやでも夏だという事実を感じさせられる。それは隣に座るおじさんも例外ではないようで、Yシャツを腕まで捲り、扇子で自分を扇いでいる。

「つたく、何だこの暑さは…。まだ初夏に入ったばかりだぞ」

「…確かに暑いね」

私の首元からつうーと汗が流れるのを感じる。おじさんは私に気をつかい、扇子で私にも扇いでくれる。今日は風が出ているので扇子で扇がれるとなかなか気持ち良い。

「こんな暑さだと参っちゃうね。あぁ〜アイス食べたい」

「…外で食べるとすぐ溶けちゃうよ」

「…だよね」

おじさんは落胆し、泔々ぬるくなったであろう缶コーヒーを飲む。

「ぬるっ!」

「…この暑さだと飲み物もすぐにぬるくなる」

「これだと扇子で扇いでも疲れて汗が出てくるな」

するとおじさんはなにかを思い出したかのように「あっ！」と声を出す。

「そういえば、少し前に流行った小型扇風機…確か名前は…なんだっけ？」

「……？」

「なんかゾウみたいの名前だったんだよな」

「小型で手に持てる…handyは便利で、扇風機…fan…あっ！おもいだしたわ」

「ハンディファンだったような気がする」

「…はんでいふあん？」

「USBで充電できる言ってしまうえば小型扇風機だよ」

「…便利そう」

「扇子と違って労力いらさないしな」

おじさんはこれこれと言ってスマートフォンに写る画像を見せてくれる。写っていたのはおじさんが言っていたように片手で持てる小型の扇風機だった。

「…こんなのがあつたんだね」

「おう、なんか去年の夏に流行ったらしいよ」

「…全然知らなかった」

「どうやらUSBで充電して数時間稼働するらしい。最近の文明の利器は本当にすご

いと思う。

「そういえば6月になったけどなんか学校行事あった？」

「…あったよ」

「なにが？」

「…避難訓練」

「ああ、確かにやるよね。【おはしも】だったよね？」

「…うん。押さない、走らない、喋らない、戻らない」

「避難訓練か…朝礼とかで火の元とか注意されるくらいだな。最後にやったのは大学かな」

「…たくさんの生徒が合流するから苦しかった」

「君も思春期だし、男子が近くにいと嫌かい？」

「…ううん、さして気にしてない。ただ単純に人混みが嫌なだけ」

「あ、あはは…そっか」

（普通、この子くらいの歳になると嫌がるものなだけだな…）

おじさんは苦笑気味で私を見てくる。何だろう？

「…あとは中間テスト」

「テストね…中二くらいから少しずつ難しくなるね。まあ、社会人の俺からしてみれば

英語と数学、国語を押さえておけばいい気がするけどね」

「本格的な数学や物理は高校からだしな」

「…数学は苦手」

「中二の最初って確か連立方程式とか文字式だよな？」

「…うん」

「…そっか、中二から本格的に未知数とかが出てくるのな」

「…うん、 x とか y が出てくるとこんがらがる」

「まあそれが連立方程式で最初につまずくところだよ。小学校と違って実数で示されてないしな」

「でも中二って代入法とかだから優しい問題だと $x \parallel \square$ って出てくるだろ？」

「…それは解ける」

「まあ君のことだ。誰かに教えてもらったんだろ？」

「…お父さん」

あの時はお父さんに頭下げて教えてもらった。

「へえ、今は大丈夫なのか？」

「…ぼちぼち。解けるようにはなったけどまた教えてもらうことになるかも」

「ははっ、困ったら俺に聞いてくれてもいいからな」

「…その時はよろしくお願いします」

「おう！任せな」

「…おじさんは苦手な科目ってなに？」

「俺か…俺は古文かな」

「…なんで？」

「…難しくない？慣用句とかって」

「で、古文で転ぶと後々の古典でも転ぶという訳よ」

「…源氏物語とか？」

「うん、それもあるしいろいろだね」

「だからもし君が古文に躓きそうなら先生に教えてもらったほうがいいよ。後々のためにね」

「…わかった、そうする」

私はこくつと頷く。するとおじさんはやけ気味に叫ぶ。

「俺に古典や古文を教えられる気がしないからね！むしろ俺も教えて欲しいくらいだよ」

「…おじさんでもまだ勉強したいと思うの？」

「…まあしたいかな。でも俺の歳ぐらいで資格とか取るために勉強する人はいるけどやる気がないと勉強する気にはならないよな」

「やっぱりそうやって目的があつて勉強するより中学や高校みたいのにのびのび全教科勉強したいね」

「俺は大学は理工学だから数学系か英語しかやってないし、文系は全く駄目だよ」

「…私は感想文とか文章書くのは得意」

「そりゃいいね。本を読んでおくとそういつた文章書くの得意になるでしょ」

「…うん、なんかすぐに文が浮かんでくる」

「いいな…俺は感想文とかものすごい考えてギリギリ三枚目とかだったし、後から見返したら文法めっちゃくちゃで担任にやり直しさせられるしで苦手だよ」

「…そんなによく喋れるのに文章書くの苦手なの？」

「ふっ…覚えておきな。よく喋れるのと文章をうまく書けることは比例しないのだよ!…まあ、当時のことであつて今では多少は書けるようになったけどな」

おじさんはくすくすと笑い、コーヒーを飲み干す。

「さて、ひとしきり喋つたことだし会社に行きますか」

「…うん、そうだね」

「君も学校頑張つてな!」

「…おじさんもお仕事頑張つてね」

「おう、ありがとう」

「じゃあ、またな」
「…またね」

思い出について おじさん視点

Chapter 思い出について

本格的に梅雨に入り、じめじめとした空気が出てきた。だが、今日は天気は曇り。風もあってなかなか過ごしやすい日かもしれない。

「はあ…なんで日曜日に出勤なんだよ」

そう、今日は日曜。多くの人はどこかに出かけたり、ゆっくり休んだりするだろう。そんななか俺は重い足取りで仕事場に向かう。一応、公園に寄るが日曜まであの子はいないだろうな。

「…いるんだよな、これが」

あの子は休日まで公園に来てこんな早い時間に本を読んでいた。彼女と休日であうのは何気に初めてだからいつもと違う感覚だ。

「休日まで早いね。おはよう」

「…あつ、おじさん。…おはよう」

少女は俺を見上げながら軽く解釈をして挨拶をする。

「今日は制服じゃないんだね」

「…うん、さすがに休日まで制服は着ないよ」

彼女の私服は、白いTシャツに通気性の良さそうな黒のパーカー、そしてホットパンツに白のハイソックスを履いていた。

「…よく似合ってると思うよ。でも君がホットパンツを履いてるのは少し意外だな」

「…ありがと」

「…でも、私もホットパンツぐらいは履くよ?」

「そうか、なんか君は肌を露出する服装は嫌ってるのかと思ってたよ」

「…極端に露出するのはイヤだけど、お母さんがファッションを意識しろって言うから」

「ああ、もしかしてそれってお母さんのコーデ?」

「……」

「うん、答えなくても大丈夫だよ」

彼女が黙ったことはそういうことなんだろうな。

「…おじさん、座らないの?」

「ああ…どっこいしょ」

「…おじさんがおじさんっぽい」

「そんなに何回もおじさんって言わなくてもいいの」

俺は少女にそういって隣に座る。

「…おじさんはこれから仕事なの？」

「うん、そうだよ」

「…大変だね」

「まあ、昨日休みだったし、そうでもないよ」

昨日は嫁さんと遠くに買い物にいったりしてあんまり休めてないけどな。

「…ねえ、おじさん」

「ん？なんだい？」

少女は読んでいた本をぱたりと閉じて俺を見る。

「…なにかおじさんの思い出話が聞きたい」

「俺の思い出？」

「…うん、なんでもいいから」

俺の思い出か…うーん、何がいいかな…あつ！これにしよう。

「あれは俺が小学校4年生の時だったかな」

「…うん」

「家族で岐阜の下呂まで旅行に行ったんだよ。その時の話だ」

俺の家では毎年1月に恒例になっていた家族で旅行に行くというものがあつた。当

時、まだ俺は小学4年生で初めて行く『岐阜県』に興味津々で、道中もずっと起きてて窓の外をずっと眺めていた。

高速を降りて、何事もなく宿泊予定の旅館に到着。家を出るのが少し遅かったせいかもう時刻は夕暮れ。着いてチェックインを済まして少し休憩してから、俺たちは温泉に入ることにした。やはり、温泉で有名なことだけあって、とても気持ちよくて危うく眠りそうだった。それほど下呂の温泉は気持ちよかったのを今でも覚えてる。

温泉から上がってみんなで部屋に戻ろうとすると、来た道が分からなくて少し迷子になったんだ。

「…えっ、家族みんなで迷子になったの?」

「うん、その旅館がなかなか道が複雑だね。案内図とかもなかったから自力で戻るしかなかったんだ」

道に迷った俺たちは、非常階段を見つけた。室内ということもあって中はうす気味が悪いくらいに暗かった。しかし、自分たちが登って温泉までの道のりを歩いてきたのは分かっていたから、俺たちはその階段を下りてみることにしたんだ。そうしたら…

「…そこで話止めないで。少し怖いから」

「なにがあつたと思う?」

「…ホラー路線でいくなら幽霊とか?」

「…筋は惜しいかな」

そこにあつたのは、不自然に設置してあつたトイレだった。そのトイレは入り口の壁に大きな穴が開いていて中には男性用の便器が置いてあつた。個室も見たところ10個以上はあるんじゃないかと思うぐらい広かつた。なにより不気味だったのが、男性用の便器から個室のトイレまでの距離が広かつた。だいたい1mはあつたんじやないかと思う。

「…そんなトイレがあつたの？」

「嘘だと思うだろ？ 実話なんだぜ」

俺たちはそのトイレをみて近寄らないほうがいいと思つたが、なぜか母親だけがトイレに行きたいと言つて入り口の正面にある個室に行つてしまった。母親は何事もなく用を足した様子で戻つてきていたが、俺は見てしまった。……その個室の壁に無数のお札が貼られていたのを……。

「…私、すごい今、鳥肌立つた」

「うん、俺も話してて鳥肌立つたわ」

実を言うと俺の母親は靈感があつて、当時はよく悪霊なんか憑りつかれて自殺しようとしていた。その時も母親はどうやら霊に体に乗つ取られていたみたいだ。そりゃあ、そんな薄気味悪いところ、普段の母親ならまず近寄らないしな。当然と言えばそれ

までだった。

「…大変だったんだね」

「まあね、俺は靈感がないからあんまりわかんないけどそういう不思議現象に遭遇したことは何回かあるけどね」

「…まだあるんだ、そのあとはどうなったの？」

「その後は何事もなく終わった…:…:といたいところだったけど、母親の様子が激変した」

そのトイレの件があった翌日、俺たちは旅館をチェックアウトして父親が車を持ってくるまで待つてたんだ。しかし、母親はいきなり駅の方に向かって歩き出した。母親が言うには父親は浮気をしているから、私たちが帰るのだと言う。もちろん、父親は浮気をしていないし母親のでたらめだというのは子ども俺でも分かった。しかし、なかなか駅が見つからず、父親が追いついた。父親は母親の様子がおかしいことに気づき説得しようとするが、いきなり母親が人前にもかかわらず叫びだした。

「…いきなり叫んだの？」

「そう、あの時はめっちゃ恥ずかしかつたな」

その後、父親の説得により母親は落ち着いて。後々聞いたことだが、あの時母親に憑いていたのは、浮気が原因で自殺した女の霊だったらしい。

「まあ、これが俺の思い出。パート1かな」

「…パート1の時点でクライマックスだよ。というか、思い出というより怖い話だった」
「でも、実話だからね」

「おお、もう7時半か。もう行かないとな」

「…うん、私は見送る側だね」

「君はこの後も読書？」

「うん…今日は過ぎやすいからあと少しだけいるよ」

「そっか…じゃあ、俺は行くよ」

俺はベンチから立ち上がり、軽く伸びをする。

「また、俺の思い出話が聞きたかったら話してあげるね」

「…うん、楽しみにしてるね」

「ああ」

「じゃあ、またな」

「…うん、行ってらっしゃい」

「行ってきます」

少女の散歩

Chapter

少女の散歩

「…行つてきます」

宿題も終わり、暇を持て余していた私は、気分転換に散歩に出かけることにした。後ろからあまり遅くならないようにねという声を聞きながら家を出る。時刻はすでに16時半。

(…どこに行こうかな)

この時間にブラブラするのは久しぶりだから悩む。時間帯が少し心配だから自転車で散策することにする。

(…自転車で散歩なのは分からないけど)

私は自転車に跨り、目的地も特に決めないまま漕ぎ出す。

(…特に行きたいところは決めてないけど、河原の方に行こう)

私は河原の方に向かう。

(…普段は気にしない光景だけど、こうやって落ち着いて見ると違つて見えるものなんだ)

移りゆく景色を横目に見ながらそんなことを思う。

(…昔から知っている道は余計にそう思えるのかも)

今ではたくさん家が建ってしまったが、昔は水田だった気がする。

(…あれっ？あそこの駄菓子屋さん、なくなっちゃったんだ)

私がまだ5歳ぐらいの時、よくあの駄菓子屋でお菓子を買ってもらったな。あの時は、妹がよくお母さんにまだ買って欲しいとごねてた。

(…あの時と比べると妹も成長したな)

今では、こんな口下手無表情の姉とも上手に付き合ってくれる優しい妹になってくれた。

そんなことを思っていると、河原に着いた。本当なら自転車を停めてしばらく河原に座っていたけれど、前日に雨が降っていて草がものすごく濡れていたのでやめた。

(…暑いからさっさと次行こう)

私は次の目的地に向かう。

(…次は私が昔遊んだことがある公園に行こう)

河原から少し行ったところにある公園に到着。

私は自転車を押して、公園内に入る。…懐かしい、入った瞬間にそう思った。

(…滑り台に砂場、ブランコにジャングルジム。懐かしいな)

公園内には複数人の子供たちが遊具で遊んでいた。私は、自転車をそこいらに置いて鍵をかけ、運良く空いていたブランコに腰を落とす。

(よく、妹と一緒にブランコに乗ったな…)

私は当時のことを思い出しながら、ゆつくりとブランコを楽しむ。私がブランコを楽しんでいると、一人の男の子が近づいてきた。

「ちよつと！そこ、おれの場所なだけど！」

「…ブランコに個人の所有権はないよ」

「しよゆうけん？…いいからそこはおれの場所なんだ！」

「…そつか、ごめんね。私、そのこと知らなかったから」

いつから公園のブランコは個人の所有物になったのだろうか。

「分かればいいんだよ。…ねえちゃん、ブランコ乗りたいのか？」

「…うん、こここの公園に久しぶりに来たから」

「…その、なんだ。…じゃあ、今だけねえちゃんにゆずるよ」

「…えつ。…いいの？」

「…おう！今日だけだからな」

「…ありがとう」

男の子は私の返事に満足したのか、向こうで遊んでいる友達のところに行ってしまった

た。

(…男の子ってよく分からないな。なんで急に譲ったんだろう?)

これだから、おじさんにも苦笑いされてしまうのかな。

私はブランコをひとしきり楽しみ、公園を出る。その際に、あの男の子が手を振ってきたので私も小さく手を振り返した。

(…もう時間も時間だし、最後はあそこに行こう)

私は最後の目的地に向かって走り出した。

もう少しで最後の目的地であるいつもの公園に着く。

(…家出てからもう1時間も経つんだ)

暮れるのが遅いためかそんなに暗くはないが、時刻は18時前。

(…着いた)

私はいつもの公園に着いた。もう夕方なこともあって、遊んでいる子供はもういない。というか、人が一人としていない。

(…まあ、いるわけないよね)

おじさんがもしかしたらいるかもと少し期待してた私は少しがっかりする。私は、自転車をベンチのそばに停めてベンチに座る。

(…ここであの人に会ったんだ)

ベンチを優しくなでて、少し前のことを思い出す。

(…最初はあの人がなんでこのベンチに座ってるか分からなくて、いきなり声かけちゃったんだっけ?)

だけど、あの時におじさんと出会わなかったら、この数か月にあつたことも無かつたと思うと出会ってよかつたと思う。

(…それだけ、おじさんのこと安心できる存在って思つたんだ)

私の周りにいる大人の男性って言つたら、お父さんだけど、お父さんとは違う感覚の安心感な気がする。なんだろ…うまく例えられないけど…そう。

(…親戚の叔父さんみたいなの?)

…うん、これが一番しっくりくる気がする。

(…私がおじさんを慕う理由ってそもそも何だろう?)

やはり、一番は優しいことだろう。あの人は赤の他人である私のことも、まるで自分のことのように一緒に考えてくれるし、酷い言葉も言わない。後は、物知りだし、なにより話す内容が面白いことかな。

(…でも、この前の旅行の話は怖かつた)

おじさんが話してくれたのは、家族で旅行に行った際に変な体験をしたという話だつた。

(…1人の時に思い出すのはやめよう。少し怖くなってきた)

私が少し怖がっていると、入り口の方に人が立っているのが見えた。その人影はじつと私の方を見ていて、今にもこちらに歩いてきそうな雰囲気だった。…ちよつとまつて(…こつちに歩いてきた!)

その人物はまつすぐこちらに歩いてきて、私の前に止まった。私は怖くなってキュツと目を閉じる。すると、その人物から呆れたような声が聞こえてきた。

「なあ、俺とぼつちり目が合ったよな?なんで怖がるふりしてるんだよ!」

「…その方が面白いかと思って」

「はあ、君はたまにそういったふざける時があるよな」

私の目の前にいたのは、帰宅途中と思わしきおじさんだった。

「…おじさんは今帰り?」

「ああ、今仕事終わったんだ」

「…でもなんでこの公園に?」

「あくなんか、今日はこの公園に寄りたくなつてな。なんで少し寄つてみたら、君がいたという訳さ!」

うん、すごい運命的なものを感じる。

「君はなんでこんな時間に公園にいるんだ?」

「…私は少し前に散歩に出て、最後に寄ったのがこの公園だったから」
「へえ〜。…自転車で散歩なの？」

「…時間帯を考えると、歩きだと少し怖かったから」

「まあ、最近物騒だしな。そこらへんは気を付けておいた方がいいよ」

おじさんは、くるりと私に背を向け歩き出す。

「…もう行くの？」

「ちよつと今日は疲れててな、君ももう遅いし、帰ったほうがいいんじゃないか」

「…確かにそうだね。…うん、私も帰るよ」

私は自転車を押して、出入り口に立っているおじさんの下に歩く。

「じゃあ、俺はこっちだから」

「…うん、またね」

「ああ、またな」

おじさんは私に手を振って、帰っていった。その後、私も家に着いたがお母さんに遅い！と叱られたのはまた別の話…

暑さ対策について おじさん視点

Chapter 暑さ対策について

「なあ、エアコンについてどう思う？」

「…エアコン？」

少女は首を傾げて、俺を見上げる。少女は少し考えてから口を開く。

「…メリットとデメリットがあるかな」

「まあ、少なからずそれはあるよな」

「…季節の気温によつて変わるけど、暖房や冷房を使えるし、就寝する時もタイマー設定できる」

「ほんとそう考えると便利な機械だよな」

「…うん、私もそう思う」

最近の夏は基本的に熱帯夜になるから、冷房がないと寝れないまであるからな。かといつて、ずっと付けておくと体が冷えて体調を崩すからな。

「冷房使つてて、一番怖いのは体を壊すことだな」

「…うん、私も冷房を使う時は27か28度に設定してる」

昔、タイマーするの忘れて冷房付けたまま寝て、腹痛になるわ風邪ひくわで散々だった記憶がある。

「そう考えると、便利な機器ではあるけど使い方は考えないとな」

「…うん、それにお金がかかる」

「まじでそれ。去年の夏の電気代見て目玉飛び出たわ」

なんで電気代だけであんなにいくんだよ…

「…おじさんもやつぱりエアコンずっと付けておくわけにはいかないんだよね？ なにか対策とかしてるの？」

「そうだな…夏なら簾【すだれ】がわりと活きるな」

これがまた不思議なことに涼しくなるんだよな。

「？すだれ…？」

「あれっ？今の中学生はすだれが分からないか」

「…言われれば分かるかも」

「ほらっ、窓にかけて日差し避けと風通しを良くする細かく割った竹のカーテンみたいなやつだよ」

「…あれのことね」

「見たことあるんだ」

「おじいちゃんの家遊びに行つた時にかかつてたのを見たことある」

確かに昔ながらの家になら高確率でありそうだ。ほんと昔の日本人は頭いい。

「…君の方は何かあるかい？」

「…私ならお父さんが打ち水してるのをよく見るかな」

「ああ、打ち水ね。あれいいよね、風が吹いたときに涼しい風がくるから」

「…うん、確かにあれは気持ちいい」

「でも、打ち水もコツがあるんだ」

「…コツ？」

「打ち水を撒く時って、日向か日陰…どっちに撒いたほうがいいと思う？」

「…暑くなつたところを冷やしたほうがいいんじゃないの？」

「ううん、本当は日陰に撒いたほうが良いんだ」

何故なら日が当たる地面に水を撒いてしまうと水分が蒸発して余計に暑くなる。そ

こに風が吹いたとしても暑くてぬるい風になってしまう。

「あとは時間帯だね」

「…時間？」

「うん、朝か夕方に撒くと効果的なんだよ」

炎天下の昼間に日向に撒いたところで逆効果なのは立証済みらしいしな。

「まあ、ほかにもあるけどこだけ覚えておけば苦労はしないかな」

「…やっぱりおじさんは物知りだね」

「年の功ってやつさ…ってまだそんな歳じゃないやい!!」

「…:私はそんなこといつてないよ」

「すまん、テンションがおかしくなった」

俺はまだ24歳だからなっ!

「夏といえばずばり?」

「…花火かな、キレイだから」

「花火ね…確かに風情があっつていいよね。思わず立ち止まって見入るほどキレイだしな」

「…なにか花火のお話もあるの?」

「うーん、大したことはないけど少しだけなら喋れるよ」

「…話してほしいな」

「おーけー。なら話してあげよう」

「そもそも、花火って何を打ち上げてるか分かる?」

「…えつと…:花火玉?」

「おっ!知ってるんだな、で大きさの単位として使われてるのが何号とか何尺とかなん

だよ」

「一番小さいのが、確か3号（3寸）で10号からは1尺になるんだっけな」

1寸は約3cmで、1尺は約30cm。約10倍も違う大きさだ。

「だから、10号とか20号が上がる花火大会があるとたくさんの人が見に行くんだ」

「…へえ〜でもそんなに大きいと民家に迷惑になっちゃうんじゃない？」

「うん、だから海とか湖とかでしか大きい花火は上がらないんだよ。要は安全確保だね」

「10号の花火玉っていくらくらいかかってるか知ってるかい？」

「…2万円くらい？」

「いやもつとだよ」

「…10万円？」

「イエス。5万から10万円かかってるらしい。まあ、会社によって多少誤差はあるか

もしれないけどね」

「一般的な大きさの5号とか7号でも1万5千円から3万円するんだっけ」

「…そう考えると、花火大会ってとてつもなくお金がかかってるんだね」

「そうだな、まあ俺たちは観客側だしそう難しいことを考える必要はないよ」

「それにしても…かあーかゆいな！」

俺は腕をポリポリと掻く。

「…蚊に刺されたの？」

「ああ、寝てるときに刺されたかもな」

「…あんまり掻かないほうが良いよ」

「分かつてはいるんだけどな…つい痒くて」

「…仕方ないけどね」

手を離すと掻いていた部分に赤い斑点ができています。

「夏はこれも嫌だよな」

「…よくわからない」

「えっ？…もしかして君は蚊に刺されないのかい？」

「…うん、不思議とね」

「まあ、蚊に刺されにくい人もいるって聞くし君もそれに該当するんだろうな」

「…そうなのかな」

「そうだろうね。…まったく蚊取り線香たいててもこれかよ。最近の蚊は強くなりすぎだ」

「お前らまじでサイヤ人かよ。不屈の心持ちすぎだわ。やられたなら大人しくやられてくれ。」

「そういうえば昔、腹立つことがあつてな」

「…なに？」

「夜寝てるときに蚊が寄ってくることはまああることなんだわ」

「…うん」

「それで、退治し終わつて寝ようと思つたらまだいてな。また、退治してを繰り返してた」

「…何匹いたの？」

「………26匹」

「…うわあ」

あの時は本当に腹が立った。あのせいでその日は寝不足だったし。

「君も今は刺されない体質かもしれないけど後々変わるかもしれないから気をつけるんだよ」

「…気をつけるよ」

「うん、えらいね」

俺は笑つて彼女を見る。彼女も恥ずかしそうに、微妙だが笑つてくれた。この表情を見ただけでも、頑張れる気がする。

「さあ、お兄さんはそろそろ行くとするよ」

「…うん、おじさんまたね」

「…はあくまあいいや。またな」

「…頑張つてね」

「君もな」

「こうしてまた1日が始まる…」

三相について 少女視点

Chapter 三相について

忙しそうにせっせと会社に向かうサラリーマンや欠伸をしながら自転車を漕ぐ大学生と思われる男性を横目に、今日はどんな話を話そうかと内心ワクワクしながら私は公園に向かって歩いていった。天気予報では、日中はとても暑くなると言っていたが、今は雲がちやうど眩しく光る太陽を隠し過ごしやすいと感じる。

(…今日は何を話してくれるかな)

私は楽しみが抑えきれず、少し急ぎ足で公園に向かうのだった。

「おおー…まだ朝なのにあぢいい」

隣に座っていたおじさんがベンチにもたれながら呟く。あれから私は、先に着いていたおじさんと合流を少し喋っていると隠れていた太陽がおはよう！と言わんばかり

に顔をのぞかせた。

「…時間が経つにつれてもつと暑くなるよ」

「まあ、会社に行つちまえば少しは楽になるんだけどな……」

「…今日は休みなの？」

おじさんは見たところ私服姿。休日なのにわざわざ足を運んでくれたと思うと嬉しくなる。

「うん、そうだよ。いやゝ平日の休みは久しぶりだな」

「…私は学校だから少し羨ましい」

しかも、今日は数学がある日。朝から憂鬱になる。

「…おじさんは何か予定はあるの？」

「ん？とりあえず、君が学校に行ったら家に帰って朝飯食うかな。今日は食ってこないでこつちに来たから」

「…ごめんなさい。せっかくの休日なのに早起きさせちゃったみたいで……」

私がしょんぼりしていると、おじさんは気さくな笑顔で気にするなど言った。

「それに休みとはいえ、俺は普段の生活リズムを崩したくないんだ」

「…それでもだよ」

（まったく…ほんと、この子は律儀だな）

「まあ、君の気持ちが取まるなら受け取っておくよ」

「……うん」

おじさんはすこし困ったような表情をしていた。どうやら困らせてしまったらしい。

(……また迷惑かけちゃった……。反省しなきゃ……)

「この事を言うとおじさんは笑いながら気にしなくてもいいと優しくいつてくれると思うけど、それは甘えだと分かっているからあえて何も言わないでおく。」

「……おお！見てみ、なんかあの雲、犬に見えね？」

「……どれ？」

おじさんは、あれだよといって指をさす。

「……確かに犬っぽいかも」

「だろ？」

おじさんは意気揚々とした表情で誇らしげだった。

「……曇って不思議だね。なんであんな形になるんだろう」

「うーん……さすがに俺も気象学とかはやってないから何とも言えないな」

「でも、もともとの流れてる曇って水なんだよな……」

「……なんか、理科で先生がそんなこと言ってた気がする」

あの時はそんなに興味がなかったけど、今思うと不思議なものだ。

「雲についてはあんまり話せないけど、雲を話すときに絶対ついてくるのが物質の三態だな」

「…固体・液体・気体…だっけ？」

「おお！よく知ってるな」

「…すこしだけ」

先生が言つてた気がする。

「今言つた三つの物質をまとめて三相つていうんだけど、化学でこれを習う時、まあ…苦労するわな」

「なが大変つて、それぞれが別のものに変化するときの呼び方を覚えるのがまず大変だ」

私は物質の三態？…というものをよく覚えてないけど、おじさんが言うにはなかなか苦労するものらしい。

「中学で習うとしたら、融解・昇華・凝固・蒸発・凝縮とか習うのかな」

融解は固体から液体へ。昇華は固体から気体へ。凝固は液体から固体へ。蒸発は液体から気体へ。凝縮は気体から液体へ。

「…あれっ？」

「？ どうした？」

「…気体から固体はないの？」

「至極当然の疑問だけど、もちろんあるよ」

「…？」

「気体から固体は凝固または昇華。名前が同じなんだ」

「…なるほど」

ようするにまとめて覚えたほうが早いという意味らしい。

「…でも、これって最初覚えるの難しい」

「そっだよね…イメージしづらいよね」

「…うん」

「だからね、俺は水を参考に覚えたかな」

「………??」

「えつとね……」

どうやらおじさんが言うことをまとめると…水の入った入れ物を用意して、熱したとき、凍らした時、を実験する。熱したときは水蒸気が発生する。凍らしたら、水は氷になった。これを参考にさきほど述べたものを覚えたらしい。

「………こんなことでよく覚えたね」

「…ははっ、今思えば俺がやってたことって、小学生レベルだったよな」

おじさんは気にした様子はなく笑っていた。

「そういえば、この前ツボ特集つてのがテレビでやってたんだ」

「…へえ、何か気になるのあった？」

「一番気になったのは心を鎮めるツボかな」

「…どこ押すの？」

私は自分の手をおじさんに差し出す。おじさんは少し控えめに私の手首を握る。

「えっと…手首をつかんでここを押す」

「…(´▽｀)?」

「そうそう」

おじさんが押したツボは『神門』といわれるツボで、緊張をほぐし、イライラした気分を鎮めてくれるツボらしい。

「…コツとかあるの？」

「確か…左手首を押した後に右手首をやるというらしいよ。各30回ずつツボを押すんだって」

「…発表前にやるといいかも」

「そうだね、俺も今度ミーティング前に実践してみようかな」

私はおじさんに他にになにかオススメのツボがないか聞いてみた。

「んー……きみは眠れない時ってあるかい？」

「……あんまりないけど、寝苦しいときとかはあるかな」

「あーそうか……まあ大人になったら使うかもしれないから教えてあげるよ」

「……うん、お願いします」

私は再びおじさんに手を差し出す。

「じゃあまずは、軽く手を握ってみて？」

「……うん」

私は言われたとおりに握る……おじさんの手を。

「……いや俺の手じゃなくて、自分の手を軽く握ってって意味だったんだけど」

「……ごめんなさい」

私は顔が赤くなっていることを尻目に、今度は自分の手を握る。

「それで、人差し指と中指の先端が当たる場所の真ん中にあるツボを軽く押すの」

「……うん？」

「そうそう。このツボは『老宮』と言って、これはどの人もやったほうが良い基本的なツボだから覚えておいたほうが良いよ、雑学としてね」

「手首で一番やりやすいのは『内関』のツボだね」

「……内関?」

「そう、手首を曲げた時に太い横ジワみたいのができるよね? その一番太いジワから親指二本分ぐらい動かしたところに内関のツボはあるんだ」

「……ここかな?」

「……ちよつとずれてるかな」

おじさんは私の手を握り、正しい位置に当ててくれる。

「このツボの効能は不眠で、入眠するときに効くツボなんだよ。だから、君が大きくなつた時にもし寝れなくなつた時がきて覚えていたら押しみるといいよ」

「……うん、教えてくれてありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

おじさんは少し恥ずかしそうに頬をかきながら、私から目を逸らすように公園に設置されている時計を見る。

「もう行つたほうが良いんじゃないか」

「……ん、たしかにもういい時間」

私は鞆を持って立ち上がり、おじさんの方を見る。

「……じゃあ、行つてきます」

「おう。頑張つてな」

おじさんは片手を軽く上げて、私を見送った。

(…今日も楽しかったな)

私は少し急ぎ足で学校へと向かうのだった。

二人について おじさん視点

Chapter 二人について

薄暗い雲が太陽を隠し、夏にもかかわらず少し肌寒いと感じる今日この頃、俺は少女が待つであろう公園に向かって歩いていった。

——もうあの子はいるか？

あの少女に出会ってから早3カ月。はじめは口数も少なく、あまりこちらを見てくれなかったが、徐々に口数も増えよく笑ってくれるようになった。

——まあ、ほかの人からしてみればあまり分からない変化かもしれないが……あの子といううちに分かったことがある。それは、彼女がとても優しい子だということ。特に彼女が家族の話題をしている時は本当に嬉しそうに話してくれるのだ。それだけであの子が家族のことを大切に想っていることがわかる。

——誰かを大切に想う気持ち：俺も見習わないといけないよな

大人が子どもに学を教えることは当たり前だが、大人が子どもに言われて気付かされる時ほど、自分の視野が狭くなったと実感するときはない。大人ってそう考えると、誰しもがみな平等に汚くなってるのかもしれない。だから、一生懸命に一つのものに取り

組む人間に魅せられるのはそういうった汚い気持ちを洗われるからかもしれないな。

俺も何か趣味の一つか二つ、みつけてみるか……

俺は早くも老後の心配をしつつ、何かいいものがないかと思考した。……そうだ、あの子にも何か趣味があるのか聞いてみよう。

「てなわけで、君は何か趣味はあるかい？」

「……いきなりどうしたの？」

俺は、ベンチに座ったと同時に彼女に質問した。彼女は訝しげにしていたが、すぐさま考えるように空を見上げた。

「……こうやって毎日、朝おじさんと会うことかな」

「……」

「……う……どうしたの？」

「……い、いやつ、なんでもないよ」

くそうう……今のは卑怯だろ……

まさかこんなにも年の離れた少女にドキッとさせられるとはな……

「ははっ……嬉しいこと言ってくれるね」

「……わぷっ」

俺は照れ隠しするように彼女の頭を優しく撫でる。

「……それでおじさんは何かないの？」

少女は崩れた髪を直しながら上目遣いで聞いてくる。……あざとすぎるだろこの子。

「んーここに来る途中でも考えていたんだけどな。これがなかなか出てこないのよ」

「……趣味って考えて出るものじゃないと思う」

「……えっ」

「……その事が好きではじめる人もいるけど、なんとなくやってたらそれが趣味になってたって人もいるんじゃないかな」

「……なるほど」

確かにこの子の言うように、日常的にやっていたことがいつの間にか趣味になっていったという事も十分にあり得る事だろう。

「……おじさんって何か好きなことってないの？」

「……言われて思いつくことがないな」

「……じゃあ今習慣になっっていることは？」

「今か？……そうだな、朝、ある可愛い女の子とお喋りすることかな」

俺はニヤツと笑い、彼女を見る。

「……っ……」

彼女は大きく目を見開き、俺と目が合った瞬間に顔ごと横にそらした。彼女の横顔が若干赤みを帯びていることから照れているんだろう。

ふふっ、さっきの仕返しだよ

大人げないだろうがそんなことは関係ない。……男はいくつになっても少年心を忘れてはいけないのだ。

「……そういうのはいいからっ！」

彼女は少しムスツとした表情で俺を見つめる。ここは真面目に答えたほうがよさそうだな。

「最近は……というか、俺は星を見るのが好きなんだ」

「……詳しいの？」

「んにゃ、まったたく。……でも、星を見てるとすごく心が洗われた気分になるんだ」

人がたまに意味もないのに空を見上げるように、俺は意味もないのに快晴の日の夜はよく星を見る。この広い銀河系の星の中でこんなちっぽけな世界で生きてるんだなんて考えると、小さな悩みなんかすぐ吹っ飛んでしまう。こんなことを悩んでるんだったら、次の楽しいことを考えよう……と。

そう考えると、星を見るっていうのも俺の趣味になってるのかもな

「…おじさんも好きなことあるじゃない」

「君に言われてようやく実感したよ。なんか無意識的にやってたことなんだけど、これが自分が没頭できていたことなんだなってね」

「…よかった。おじさんの趣味が見つかった」

「…ホント君のおかげだよ。…ありがとう」

『子どもには大人でも気づかない事がある』もちろん、身体的な問題もあると思うが、一番は心の変化だろう。子どもの頃は、なにかしら可能性があったら迷わずにそれに突っ走っていたが、大人になってからはいくら可能性があっても、確率が低かったら諦めてしまう。子供の頃に体験した周りがとてもキラキラしていたのは全部が可能性があるものに見えていたからなのだろうか。

「…どうしたの?」

「…ううん、なんでもないよ。少し考えごとしてただけだから」

…少し星に関しての本を帰りにでも買っていいのかな。

「…んっ?…お、久しぶりに見たなダンゴムシ」

「……」

「あれ?君は虫は苦手かい?」

「…前にあまり得意じゃないって言わなかった？」

「…そういつてたかもな。でもな、ダンゴムシって観察すると意外と面白いんだ」

「…なにが？」

「ダンゴムシって右に曲がった後は、次は絶対に左に曲がるらしいよ」

「…へえ、そうなんだ」

「こういった習性を交代性転向反応というらしい。だから、ダンゴムシは迷路でもジグザクに動くことにより迷うことなくゴールにたどり着けるわけだな」

虫って人間では理解できないような習性や生態を持つてるから、こういったことを雑学として持つておくと楽しくなる。

「…おじさんって何でも知ってるよね」

「ううん、なんでもは知ってないよ。自分が興味を持ったことだけを君に自慢のように話しているだけさ。それで、君が少しでも楽しんでくれるなら重宝だよ」

「…おじさんが話してくれること、とても為になるから私は好きだよ」

「…ふふ、そうかい。そう感じてくれてるならこちらも話してよかったよ」

面と向かつては気恥ずかしくて言えないけど、俺も君と話している時間はとても好きだよ…。

「ん…もうこんな時間だね、お互い行くべき場所に向かおうか」

「…うん、惜しいけど仕方ないね」

少女は立ち上がり、パンパンとスカートに付いた砂を落とした。

「…じゃあね、おじさん」

「ああ、お互い頑張ろう！」

「…うん！」

少女と俺は別れを済ませ、俺はとぼとぼと会社への道を歩くのだった。

夏休みについて 少女視点

Chapter 夏休みについて

ミンミンミンとセミの鳴き声が聞こえ始め本格的に夏だと感じ始めた今日この頃、私はカーテンの隙間からの光と若干の寝苦しさとで目が覚めた。

—— 今何時だろ…

手を伸ばし、机の上に置いてある時計を取り時刻を確認する。

—— えっ！もう7時!?

私は二回くらい時計の針を確認したが、やはり時刻は7時。恐らく…昨日、遅くまで本を読んでいたので原因だろう。

—— 今から支度しても間に合わないか…

幸いにも学校は先週から夏休みに入り、学校面で焦る必要性はない。問題は…

—— もう、おじさん行っちゃったかな…

一番シヨックなのは日課を疎かにし、私の楽しみであるおじさんとの時間を無くしてしまったこと。…いや、まだもしかしたらいるかもしれない。

私はすぐさま立ち上がり、身支度を始めた。ぱつぱとパジャマを脱ぎ、私服に着替え

る。着替え終わり急いで1階に降りて、洗面台で顔を洗い髪を整える。

あまり時間はかけられないし、こんなものでいいか

私は洗面所を出て、リビングにいたお母さんに少し外に出てくると告げ、靴を履き外に出た。

おじさん……まだいるかな……

私はあまり自信がない速力で走り出した。

私が家を出て数分後、程なくして公園に到着した。いつものように笑顔で挨拶してくれる人はいなくて、ただセミの鳴く声だけが無情にも間に合わなかったことを突き付けてくる。

やっぱり間に合わなかった……

ちらりと時計台を見ると、時刻は7時20分。私はとぼとぼとベンチまで近づいた。遠くからは分からなかったがベンチにはおじさんがいつも飲んでるメーカーの缶コーヒーが置いてあった。

やっぱり今日もおじさんは来てくれたんだ

そのことが分かっただけで胸が痛いぐらいに締め付けられる。おじさんはいつも通りに来てくれたのに私は何をしていたんだろう……。私はいつまでも突っ立っていては仕方ないと思い、家に帰ろうと出口に向かって歩き出す。

「そこのお嬢さん、私と少し世間話でもいかがですか？」

私は瞬時に誰の声なのか分かり、勢いよく振り返った。

「よっ！今日は遅かったな、もう行っちゃうところだったぞ」

「……そのわりには私服みたいだけど」

「ははっ！行くのは会社じゃなくて自分の家かなー」

振り返った先には片手をあげて、私に微笑むおじさんがいた。

「……なんでいるの？」

「今日は有休をとっていてな、午後からは嫁さんと出かける予定なんだ」

「……そう……なんだ」

先にベンチに座ったおじさんはポンポンとベンチを叩き、私に座るように促してくる。私は拒む理由がないので、言うとおりにおじさんの隣に腰掛ける。

「それにしても珍しいな。寝坊かい？」

「……うん、昨日は夜遅くまで本読んでそれで寝坊しちやった……結構待たせちゃった？」

「まあ、一人でぼおーとしてたからそこまで待った感じはしないかな」

でも、待たせたことには変わりない。私は一言、おじさんに謝る。

「気にしなくてもいいよ。偶には一人でゆつくりと考える時間も必要だったからちよ
どよかったよ」

おじさんは気にした様子はなく、ぽんぽんと優しく私の頭を撫でる。

「それに君も相当急いできたんだな、髪、はねてるぞ」

「…そこは気にしなくてもいいのに」

「う…すまない」

「…あいかかわらずデリカシーがないね」

私は手櫛で指摘された箇所を軽く流すが、直りそうにないので放置する。

「…そういえば気になったんだけど」

「?どうした?」

「…おじさんって先に公園にいたんだよね?なんで私が着いたときはいなかったの?」

「ああそれはな、これを家に取りに行ってたんだ」

そう言っておじさんは懐から四葉のクローバーの入ったしおりを差し出してきた。

「…これを?」

「そうそう。先日、偶然四葉のクローバーを見つけてな折角だからしおりにして君にプ
レゼントしようと思ってたんだけど、家に忘れちゃったから取りに帰ってたんだ」

私は渡されたしおりをじっくりとみつめる。……これをわたしのために。

「……おじさん」

「どうした？」

「……ありがとう。とつてもうれしい！」

私は自然と頬が緩んだ。家族以外からのプレゼントは初めてだからすごく心が躍る。

「その笑顔が見れただけでプレゼントした甲斐があるもんだよ」

「……笑顔？」

私が？ぐにぐにと自分の頬をいじる。

「君のいろんな表情が分かるようになってきて俺は嬉しいよ」

「……そう」

その優しい笑みは照れるからやめてほしい……

—— まったく……デリカシーのない人だな……ふふっ

私はつい嬉しくなり、心の中で笑った。

「ほい、冷たくはないだろうけど」

「ううん、買ってくれるだけでもうれしい」

おじさんは私を労わって、自動販売機でお茶を買ってきてくれた。…遠慮はしてるのに。

「そういえば君はもう夏休みなのか？」

「…うん、先週から夏休みだよ」

「いいなあ、夏休みがあつて…俺はお盆まで仕事だよ」

おじさんは、はぁとため息をついて肩をすくめる。

「だけど、俺の夏休みの印象つてはつきり言つて地獄なんだよな」

「…なんで？」

「君は部活に入つてないんだよね？」

「…うん、うちの学校は自由入部だから」

「そうか…俺はバレーボール部に所属してたんだけど運動部の宿命なのかな、これがまたハードだよ」

「朝からの時もあれば、昼からの時もあつただけど、朝からグラウンド20周した後、バレー部全員で馬跳びでグラウンド15周とか毎日やってたから顧問を死ぬほど恨んだよ」

「…いまやつたら間違ひなく熱中症で倒れるよね」

「ははっ！ちがいない！」

「あとはやつぱり宿題かな。ほら、夏休みの友みたいなやつ」
「…あるよ」

夏休みなのに、なんであんなに量が多いんだろうか。休みとは一体なんなのか…

「落胆するよな…あんな量出すなら普通に学校あつたほうが良いわ」

「…おそらく全国の小中学生がアレを渡されたとたんに関現逃避をする」

「まあ、あれの対処法は毎日コツコツやるだな」

「…うん、私もそうしてる」

夏休みは約1カ月と1週間弱。数字にしておおよそ40手前ぐらい。だいたい夏休みの友って毎日3〜4ページ以上はやらないと終わらない気がする。

「まあ、それに加えて自由研究とか読書感想文とかもあるだろう?」

「…ある」

「ああ、懐かしい。読書感想文で死にかけてた覚えがあるわ。読んだ本は内容が全然頭に入ってこないし、感想文もすごい幼稚なものに仕上がるので散々だったな」

「…おじさんは自由研究なにやったの?」

「ん〜たしか虹のことについてやった記憶がある」

「…へえ〜意外とロマンチスト?」

「ばっか、俺はいつでもロマンを求める男だぞ」

へへんーとどや顔しているおじさんはほつといて話を進める。

「…虹の面白い話ないの？」

「あんまり覚えてないんだけどなく多分、みんなが知ってるようなことしか知らないぞ」

「…いいから言ってみて」

「虹つて雨が止んだ後に晴れないと見れないことは知ってるか？」

「…そうなの？」

「厳密に言えば、光が差さないと見れないだけだな」

「虹はそもそも光を反射したもので、人間が視認できる色っていうのは所謂、赤橙黄緑青藍紫の七色つてわけだな」

「…面白いのが太陽の反対側に虹は見えるんだ」

「…なんで？」

「たしか光の屈折が関係してた気がするけどあんまり覚えてない」

「まあ、そんなことを自由研究で書いたんだ」

「…面白そう」

「だろ？ 普段、何気なく見てるものを一から調べてみると興味深いものだったりするんだよ」

「今見えるものなら、時計台はどうして動いているのとか、水飲み場の水は、はたして安

全といえるのかとかね」

「…よく思いつくね」

私はそう言ったことはぱつと思いつきそうにないから素直に感心する。

「んー深く考えたと余計に難しく考えちゃうから、これは難しくなりそうと思つたらすぐさま思考を変えたほうが切り替えやすいよ」

「できないならできないでスパツと諦める。そう言った切り替えも大事なんだよ」

「まあ、一概にもそうとは言えないかもしれないけどね！」

ははっ！とおじさんは高らかに笑う。おじさんはとても柔軟的な考え方をしている。この人のこういっただ面を見習わなければいけない気がする。

「そういえば……」

あれから私たちは結構長く喋った。お互いに休みという事もあって、いつも以上に話しこんでしまった。おじさんはこれから仕度とかもあるから帰らなければいけないらしい。

「…ほんとに今日はありがとう。このしおり、大切にするね」

「おう、是非とも使ってやってくれ」

私は胸の前で、宝物を扱うようにプレゼントされたしおりを両手で包み込む。

「ふふっ……じゃあそろそろ行くね」

「……うん、またね」

「おう〜」

おじさんはひらひらと片手をあげて公園を出ていった。私は改めて渡されたしおりを見た。

ふふっ、初めてのプレゼント……か

私はそのことが嬉しくなって、公園を少し駆け足で出ていく。

後日、家で本を読んでいるとお母さんがしおりの存在に気づき、また問い詰められることになることなど今の私には予想もできないのだった。

怪談について おじさん視点

Chapter 怪談について

ペラつと少女の本をめくる音が鮮明に聞こえるくらい静かなこの時間。喋る話題も特になく、お互いが好きなように時間を過ごしていた。まあ、俺はコーヒー飲みながらぼおーとどうでもいいことを考えながら辺りを眺めてることしかしてないんだが。

——この公園、ベンチに屋根付けても良くないか。暑すぎて参るんだが。

ほんと我ながらどうでもいいことを考えるものだ。人間というのは無心の時はどうでもいいことを考えるものなのだろうか。俺だけかもしれないけど。

「…さつきから何ぼそぼそ呟いてるの?」

「…えっ? 聞こえてた? っていうか漏れてた?」

「…うん、なんか参るとか、どうでもいいとか」

「……」

……もしかして俺って普段から考えごとしてる時、声に出しちゃってたのか。だからたまに会社の同僚から訝し気な目線で見られるわけだ。

「…どうしたの?」

「いや、自分の中の疑問が今解決したところだよ」

「?よく分からないけどよかったね」

あのそんな保護者みたいな温かい目で見ないでくれませんか、地味に傷つくんです
が。俺は不思議っ子じゃないぞ!

「…不思議か」

「…?」

「いやね、この世界は不思議な出来事もあるものだと思つてね」

「どういうこと?」

「前に俺の母親が靈感があるつて話はしただろ?それ関連さ」

夏と言えばやっぱりホラーだよな!俺はこの手の話が好きだからわくわくしてしま
う。

「突然だが、その電信棒付近の道路に何か見えたりするか?」

「…見えないけど」

「まあ、当たり前だよな」

これは母親の話なんだが、霊というのはそこら中にいるらしく、車に乗つていても霊
が普通に道端を歩いていたりするのを見るらしい。それでよく父親がビビっていた。
そりゃ、父親からしてみればそこに人なんていないのに、今人が歩いてなかった?とか

言われればビビるよな。

「だから、もしかしたら俺らに見えないだけで俺らの後ろや前で話を聞いてるかもな」

「…あんまり怖いこと言わないでよ」

「ホラー苦手？」

「…別に苦手じゃないけどおじさんのお母さんのお話は真実味があるからちよつと怖い
の」

「ほかにもあるよ」

これは霊感ない人（俺とか）に関係がある話なんだが、日中に立ち寄らないほうが良いのは人気がないところ。裏路地とか、廃屋、古びた家や寺があるところなんかは立ち寄らないほうが良いらしい。特に気分が落ちていいる時に行くのと霊に憑りつかれやすいらしい。普段、霊に憑りつかれたことがない人の方が大半だろうが、憑りつかれたらどこかしらが不意に重くなる。肩や腰が代表的だが、それは霊が寄りかかるようにして憑りついているから重くなっているようだ。気分がナイーブだからといってそういった所に不用意に近づくのはオススメしない。

「だから君も気を付けてね、この前も遅い時間に散歩？サイクリングしてたみたいだし」

「…あれはたまたまあんな時間になっちゃったんだよ」

「怖い話って真実味がないけど母親の話だけは妙にドキドキするんだよな」

「…ほんとこの話聞いただけでも鳥肌が立つよ」

「ふふつ、じゃあ君が怖がっちゃうから違う話でもしようか」

「…ムスツ。別に怖がってなんかないもん」

「ははっ！ほんとに君はかわいいね！」

少女の頭をやんわりと撫でる。

「……むう」

少女は子ども扱いされるのが好きじゃないのかムスツとしていた。俺は少女に謝りながら次の話題へと移る。

「この前スーパーでスイカを買ってきて食べたんだがおいしかったな」

「どうやら今年は日照りが少なく梅雨が少し遅かったおかげで水分が多い野菜が育つて
るみたいだな」

「…きゆうりとか？」

「そうそう、だけどかわりに桃とか梨が甘みがなくて育ちが悪いみたい」

「…そう。私、桃好きだから少し残念」

へえ、桃が好きなのか。だけど今の桃はどうなんだろうな、甘い果実があまり育ちが
よくないと聞いてたから今年は一回も買って食べたことがないんだよな。スイカはう
まかったけど。

「まあ、次は日照りが強くなるだろうから作物がちゃんと育てばいいんだけどね」

「その前に俺がこの暑さでへばりそうだけど」

「…おじさんは暑いのだめって言ってたもんね」

「その通り」

というかこの暑さで平気と言える人の方が異常だと思う。

「知ってるか？天気予報でやる最高気温っていうのは気象庁近くの日蔭で測られているからコンクリートとか土とかの照り返しは考慮されてないんだ」

「…じゃあもつと暑いのか？」

「実際はアナウンスされた温度より5度は違うって話だけど真実かどうかは分からないな。でも、実際35度と予報されても、体感温度は絶対35度より暑いと感じるよな。そう考えると本当なのかもしれないな」

「というか女性の君に聞きたいんだが」

「…女性。…何でも聞いて！」

「…お、おう」

なんでこの子は急に目をキラキラし輝かせたんだ？あれか、女性扱いされたのが嬉しくなったのか？よくわからん。

「昔、バイトしてた時に40歳ぐらいのおばちゃんが4月ぐらいで寒い寒い言ってたん

「ただど女性ってそんなに冷えやすいの?」

「……知らないっ!」

「……あれっ?俺もしかして地雷踏んだ?……よくよく考えたら14歳の子に40歳のことを聞くのって相当失礼なんじゃないのか…。」

「ごめん!あまりにも今のはデリカシーが無かったな、謝るよ」

「……別に気にしてないっ」

「いやあからさまに気にしてますやん。首まで横に背けちゃって。擬音付けるならまさにピッタだよ。」

「ほら、アメちゃんあげるから許して」

俺は懐から飴を取り出し少女に差し出す。少女は渋々といった様子で受け取る。

「……次はないからね」

「かしこまりました」

「……んっ」

「うまいか?」

「…おいしい」

「そうか」

二人の会話はそこで途切れた。しばらくして俺が会社に行く時間が来てしまったの

で今日はそこで別れたがなにか釈然としない一日となつたのであつた。

——女の考へてることつて幾つになつても分らないな

あいかわらず女心が分からない俺なのであつた。